

A B C D E

F G H I J

K L M N O

P Q

アール

2020

S T

U V W X Y

Z

芸術学科の素顔をお見せします

写真家になりたいという学生がいれば、学芸員を目指す学生もいる。
芸術学科（芸学）には“発信者”という共通点を持ち、
様々なジャンルの夢を持った学生が集まっている。
今回、異なる学年、入学方法で入学し、学業以外に様々な分野で活動している4人が集まり、
「芸学」の意義を考えるための座談会を行なった。
芸学生はどんな思いで多摩美術大学芸術学科に進学したのか。
一人ひとりが考える将来についての語りが、芸学、多摩美での学びから紡がれる。
そして「伝える」ということはどういうことなのか。
芸学の特徴の一つであるこんなキーワードにも話は及んだ。

YOUは何しに芸学へ？ 芸学座談会



—— 進行の内田です。普段芸学生が何を考
えているのか、進路に悩む高校生、そして現
役芸学生にも伝わればと思い、この「芸学座
談会」を企画しました。いろいろ聞きたいこ
とはありますが、まず最初に、芸学を志した
きっかけを教えてください。
徳川葉南 私は第一志望は芸学ではなかった
んですが、自分の中でやりたいことが「発
信」であることは確か、それは高校時代か
ら感じていました。この学科を調べたとき
に凄く「発信」を強調していたのがわかった
ので、私はこの学科に推薦入試で入りまし
た。

詞とか。本当は日本文学を学ぼうと思ってた
んですけど、調べてみたら自分のやりたいこ
とは違うと思って。この芸術学科では、他
の大学と比べて「文学を芸術的に捉える」こ
とを教えていると聞いたので来ました。
田波奏平 そこに魅力を感じたと。
小川 そう。
田波 僕は、ものすごく単純なんですけど、
親に勧められたので。母が多摩美出身なので
「受けてみれば」って言われたんです。調べ
てみたら、マスコミ系の授業があるし、何よ
り美大なのに絵を描かなくても入れる！と知
りまして。小論文で入れるし、やってみると
も面白そうだからって理由で受けたら受
かった。

—— 次に、それぞれどんな活動をしてい
るのか、将来どういうことをしたいのかを教
えてください。
徳川 私は今、学業とは別にビデオグラ
フアーをしていて、ビデオの撮影と構成と
編集、音楽制作をしています。具体的には、
『NYION JAPAN(ナイロンジャパン)』のプ
ロモーションを作らせていただいたり、あと
は「エビ中」って知ってますか？
一同 頷く

—— すげえ。確かに芸学だと、個人で活
動するジャンルの幅が広いよね。美術大学っ
ていうのもあると思うけど。
小川 僕は音楽と演劇をやっています。最近
は、曲ついたり歌詞書いたりライブやったり
してますね。今は、レコーディングとか編
曲とかミュージックビデオとかいろいろ自分
でできるようになりたい。
小川 方向性とかってあるの？
田波 表現する人になりたいっていうのがあ
ります。



芸学は学びの範囲が広いからね。
黄夢圓 私は高校一年生くらいから芸術系の
大学に行きたいなと思ってたんですけど、絵
とかは習ったことがなかったので制作系は無
理だなと思いました。本当は総合大学の総合
文化のような学科に進もうとしていたんです
が、美大に絵を描かなくても入れる学科があ
るって知って「よし、美大に行こう」と思い
ました。最初は別の美大に入ろうとしていた
んですが、調べていくうちに多摩美の芸学の
方が自分に合ってるなとわかって。

座談会 メンバー

1年 徳川葉南

高校時代よりビデオグラファーとして活動。2019年の活動として、アパレルブランドの新作プロモーションやNYLON JAPAN主催イベントのプロモーションムービー、アイドルグループ「私立恵比寿中学」のライブ映像、書籍「ROU & TIN」のプロモーションムービーを制作。自身ではSDGsを軸として、脚本、構成、カメラ、編集、衣装、ヘアメイク、音楽を全て自身で行うショートムービー制作を行っている。「HANAN」の名でInstagram : small.flower_girls



2年 田波奏平

芸術学科2年生。1998年4月3日生まれ。二黒土星。運命数は七。好きな漫画は鴨川つばめ作『マカロニほうれん荘』と伊園透作『辺境で』。漫画を買いすぎるせいで毎月下旬はもやし生活を強いられている。趣味は占いだが、スピリチュアル系ではないと言い張っている。最近ショックを受けたことは同じ巻を4回買ってしまったこと。一番ショックを受けたことは、小学3年生のとき、アンソロジーだと買って買った漫画がBLだったこと。



2年 小川哲央

作詞と作曲するのが好きです。最近が多摩美の図書館に夜までこもって詞を書いたり、宮沢賢治を読んだりしています。この「芸術」という漠然とした言葉を、理論付けながらかき分けていくことは、キリがなく、とても大変に思えます。さらに、その理論も自身の発信・表現まで結びつけられてはじめて、価値のあるものになるという厄介者です。芸術学科の授業は、そこらへんの境界をちゃんと認識しておけば、とてもタメになるものだと思います。



3年 黄夢圓

美術が大好きです。演劇が大好きです。デザインが大好きです。文学が大好きです。要は、芸術が大好きです。でも、芸術はお腹を満たしてくれなければ、眠くなるのを防いでくれるわけでもないです。生産性なんてそんなにないんです。芸術って一生懸命しようもないことをやることだと思ってます。でもその「しようもないこと」が誰かの心を揺れ動かす。それって素敵すぎませんか？ 一生懸命しようもないことを一生やり続けることが私の夢です。



小川 大学生の間が自分にとっては猶予期間みたいに思えて、その間に方向性が決まればなと思う。

田波 僕は漫画が好きで、二歳のときからずっと読んでた！

黄 二歳：！？

田波 家に漫画が五、六千冊くらいあって、子どもの頃からずっと読んでた。僕は漫画が好きだから「漫画の編集者になろう！」って考えてます。今は編集者になったつもりで昔の漫画を読みながら「別の漫画は描けないのかな」とか、自分で文章を書いてみて「話の筋は間違っていないのかな」とか、編集者として綺麗な文章を書くように練習をしています。

黄 芸学でも意外とどちらかという表現したい人が多いイメージがあるんですけど、私の場合は、それを支える人になりたくて。

キュレーションを軸にしてやりたいんですけど、対象を美術に絞りたいわけではないんです。今年はずミでの展覧会のほかに演劇のプロデューサーと、ファッションショーの運営を経験しました。プロデューサーの立場で、華やかな世界の裏方にいたいんです。私は今、美術史設計ゼミと展覧会設計ゼミに入ってます。展覧会設計ゼミはキュレーションを学びたくて入ったんですが、いわゆる理論的なこともやりたくて。卒論で考えてるのが、「展示空間をどういうものにしたらもっと能動的な鑑賞を促せるのか」っていうもの。その一環として、展覧会のキュレーションや演劇やインスタレーション、ライブのメカニズムとかを考えたり、ファッションショーの運営にも携わってます。正直、音楽とか美術とかってしようもないことで、なくても大丈夫なものだと思ってるんですよ。でも、音楽も美術も演劇も人の心を凄く動かすじゃないですか。しようもないことを一生懸命やるのが好きで、いろんな人とやるのが好きなんです。

皆似てるけど、各々違う方向を向いてるね。

田波 支える側とつくる側に分かれてる。

両者が共存してるっていうのも面白いところですね。では、それを踏まえて、芸学のいいところを教えてください。

徳川 芸学でよかったところは、学びの幅が広いところですね。教授たちはそれぞれ研究ジャンルが違うし、一見興味のないような授業でも「芸術」という大きな枠があるので、自分の知識と意外とつながってきたりするんですよ。まだ芸学に入って一年も経ってないですけどそれを感じています。

田波 あと、芸学は単位が取りやすいよね。他の学科と比べて自分の時間が確保できる気がする。

小川 何気なく教授が言った教えの中にも、必ず一個はもの凄く自分にとってためになることがあるから、それだけでも得したかなと思います。

田波 この学科だと、一、二年で制作の授業をいろいろ受けられるのは本当にいいと思う。他の学科だと油画なら油画、日本画なら日本画って一本に絞っちゃうから。

—— そうだ、生活リズムについても聞きたいな。

徳川 私は通学時間が一時間半くらい。一年生だからわりと授業もあるしバイトもしているんで、自分の時間は自分でつくるしかなくて。大学生は自分で時間をつくらないといけないですね。四月は生活に慣れなかったです。

—— 小川くんは一人暮らしだった？

小川 そう。僕、一年生の時は実家暮らしで、通学に往復三時間くらいかかってたから、この前大学の近くに越してきた。時間はできたけど、その分作業するから寝不足になる。生活リズムは悪いですね。

一同 笑

黄 私、一年生の中に八十単位取っちゃったんだよね。

田波 すごい…そんなに取れるんですか？

黄 うん。月曜から土曜までほとんどフルで入れると八十単位取れるんだよ。だから二年生のうちに卒業までに必要な百二十四単位取り終わったの（編集部注：卒業研究など三、四年生にならないと取れない授業は除く）。三、四年生の間は好きなことやりたいくて、高校の時間が厳しかったから、高校に行く感覚で大学に通えばいいなって思ったの。バイトも週一で二時間とかしか入ってなかったな。それで、学校終わってからだと全

然時間ないなと思って、二年生の時に取った解決策が朝にバイトすることだったの。パン屋さんでバイトするようになって、朝五時からい起きて五時半から八時まで働いてから学校に行くことにした。そうすると、放課後の時間を全部使えるんだよね。

小川 慣れないとキツくないですか？

黄 慣れれば、朝は気持ちいいと思う！ 創作とかしてる人におすすめてです。

—— 結構いいかもしれない！

徳川 私も朝作品つくったりしますよ。バイトが夜だから朝しかない…。

徳川 静かなんですね。シャキッとします。

—— それじゃあ、次の質問いきましようか。おすすめの授業はありますか？ 個人的には、自分の学びたい分野の授業が一つはあ

るっていうのはいいところだと思うな。僕は今年受けた「映像表現」の授業が楽しかった。

田波 自分で短編の映像をつくるやつね。

黄 私はこの「言語メディア」の授業二年間やってる。私にとっては文章書くほうが写真とか映像とかよりは楽しかったから受講できたな。

田波 僕が楽しかったのは一年生の時の「芸術基礎・制作」の日本画の授業かな。高い岩絵の具をたくさん使えたのが楽しかった。金箔とか銀箔も使えたり、授業でいろんな画材に触れられるのはすごくいい！

徳川 私は油画（※「芸術基礎・制作」の授業は、前期に日本画/油画、後期に版画/彫刻をそれぞれ一つずつ選択する）でした。それこそ、私は制作の授業では後期の版画よりも前期の油画の方が楽しかったです。なぜかというと、油画をやってみて自分の色彩感覚

がわかったからなんです。「自分ってこういう色を選びがちだな」というのが自然とわかって。それを講評で言ったらほめていただきました。私も絵とか描いたことなかったけど、描いたことないからこそ自由に描けましたね。新たな発見もあったし、それが楽しかったです！

—— いいことだ…。では最後に、芸学の大きな共通理念に「伝える」学科、というのがありますが、それぞれが考える「伝える」を教えてくださいなと思えます。

一同 悩む

—— 芸学をつかった方が芸学をつくらうとしたのって、他の学科にないものを全部やろうとしたからなんだよね。

田波 そんな闇鍋みたいなの…。

—— ごちゃ混ぜだよ。色んな培ってきたものを外に出せれば卒業できるって感じ。

田波 「ステーキ美味しいから入れよう！」「ラーメンも美味しいし！」「じゃあケーキも！」って完全に闇鍋じゃん！それを美味しくて伝えるっていうことなのかも。

—— 聞いてると、皆「これがしたい」とかも含めて自己分析できてるし、学科に対していろいろ考えてるんだなと思いました。

田波 結局、「伝える」ってことは自分の理解を外に広げるってことだから、それをわかりやすく噛み砕くのが芸術学科のいいところなんじゃないですかね。

一同 拍手

—— 田波くんありがとうございます！では、いよいよ締めをしましょうところで、座談会を締めたいと思います。皆さんありがとうございました。

座談会の原稿を読んだ

小川敦生教授（本誌編集長）の感想

皆さん、目標があってアクティブに活動している人が多い。素晴らしいですね。学内でも「芸術学科って何をするとところですか？」と聞かれることが多く、まずは「美術史や美学など理論を研究する学科です」と答えます。

でも、それだけではない。美大ではキャンパスの中で作品を制作している学生がたくさんいるし、教員にもクリエイターが

多くて、とても刺激的。この環境を生かさない手はない。皆さんのおしゃべりを読んでいると、すでにそれを実現している。美術だけでなく文学、漫画、ファッションなど多様なジャンルにアプローチしているのもグッドです。

ステーキもラーメンも美味しいから闇鍋で！ 以前ある食堂で、ご飯が切れてその店で人気だったカツ丼が作れなくなったときに店主が「カツラーメン」というメニュー外の料理を出したので食べたら、超美味だったことを思い出しました。こうして新しい文化が生まれるんだと思った。芸学にもとても期待できます！

芸術学のカタチ

芸術学科の授業を「カタチ」で見ると

芸術学科は、アート・プロデューサーやキュレーター（学芸員）など
アートを世界に発信する人材を育成する学科だ。
「ことば」を用いて芸術という広い海を渡るために、
「つくる」「考える」「伝える」の三つを学びの柱に据えている。

—では、具体的にどんなことを学んでいるのか？

そんな疑問に答えるため、この記事では本学科で開講されている
各講義のそれぞれを「カタチ」で表してみた。
ここでは、八つのゼミを核にした50を超える全講義のうち、
40の講義をピックアップした。

ことば

- 『言語芸術論』／「芸術」の中にひそむ言語について考え、また、言語を通じて、身のまわりにある「時間」や「空間」を、具体的にとらえようとする。制作課題として、生涯にわたって継続できる「記録のシステム」を考案することが課される。
- 『芸術基礎・ことば』／「ことば」と「書物」の本質とは？ 本の企画や制作といったエディトリアル・デザインの実践の中で、ことばを組むということの大切さと広がり理解していく。
- 『詩学』／詩のエッセンスである「ポエジー」。どうしてそれが起こりえるのかを、その秘密を感じ取り、世界のひそかな源泉として考えていく。
- 『芸術学英語10（翻訳文化論）』／翻訳とは何か、そもそも翻訳とは可能な行為なのか？ 翻訳をめぐる考察と実践を通し、この大きすぎる問いへの答えに近づいてゆく。
- 『言語思想史』／文学作品を読む、書く、批評する。哲学、詩学、美学、歌論などを参照しながら、言語芸術の経験を探えなおす。

フィールドワーク

- 『文化人類学R』／さまざまな「社会問題」や「表現」に焦点を当て、文化人類学や哲学の蓄積を参照しながら議論し、思考を展開するための訓練をする。
- 『デザインジャーナリズム論』／「いいデザインとは何か」を追求。デザインジャーナリズムと、現在のデザイン批評制度について思索する力を養成する。
- 『芸術と経済』／美術館、コレクター、美術館、オークションなどの役割を探りながら、経済の視点で芸術の世界を捉える力を身につける。
- 『音楽と美術』／音楽と美術の関係を分析的に捉えながら、相互の影響や新たな芸術の発生、さらには芸術そのものの成り立ちを探る。
- 『デザインR』／「観察」と「考察」と「表現」を行いつつ現代におけるデザインの意味と役割を思索し、自らのデザインの視野を構築する。

映像

- 『映像文化史研究』／映画・映像について多様なテーマを取りあげ、映像史を研究するための知識や調査方法身につけていく。
- 『パフォーミングアーツ史』／「舞踊」を手がかりに、上演芸術の特性を歴史的な視点から裏付け、現代の作品をより豊かに鑑賞するための眼を養う。
- 『映像と身体（ジェンダー文化論）』／「男」「女」とは？ ジェンダーやセクシュアリティの多様性を理解し、異性愛規範やホモフォビアを乗り越えた主体的な思考を促す。
- 『映像表現』／たとえば映画や映像作品の中で「音」が聞こえるとは、どういうことなのか。制作の実践を通して、映像作品への理解を深めていく。
- 『写真表現』／言葉には文学という芸術の境地があるように、美しい写真を撮影する方法を学びながら、その先にある芸術的写真についての考察を深める。

美術史

- 『アメリカ現代美術史』／「現代美術」という、第2次世界大戦後成立した美術史上の新ジャンルについて、諸運動による定義をもとに考える。
- 『フランス近代美術史』／作品の構造分析や歴史的意義の究明、成立状況の解明等を試みつつ、19世紀後半から20世紀前半のフランス近代美術の歴史を概観する。
- 『日本近代美術史』／日本近代美術史における基礎的な知識を修得しながら、各々の問題意識と照らし合わせていく。
- 『日本戦後美術史』／「戦後」の美術はいかに形成されたのか、現在展開している芸術作品とどう関わるのかを考察する。
- 『美術特論』／美や芸術について古代以来積み重ねられてきた思想の歴史を渉猟する。思想家の扱っていた諸問題は、現代においてどうよみがえっているのか。

批評

- 『民俗芸術論』／「民俗学」という新たな学問を打ち立てた3人の巨人、南方熊楠、柳田國男、折口信夫の営為。それらは過去の遺物ではなく、現代日本の最先端の表現、さらには未来にまでつながる可能性を持っている。
- 『音楽のアーカイヴ』／音楽は、形を持たないがゆえつかみどころがない。日本音楽のルーツ「神楽」を知ることで、世界でも類をみない多様な多様な伝承音楽、神事芸能を理解していく。
- 『縄文図像学』／縄文時代と聞いて思い浮かぶのは、原始人、歴史教科書に載っていた汚い土器、そして「ドラえもん」に登場する透光土偶！ 現代人と縄文時代の人々との「つながり」を探え、芸術の本質に迫る。
- 『アジア思想史』／思想と芸術はどう絡み合ってきたのか。岡倉天心、鈴木大拙、柳宗悦、井筒俊彦の著作を導きの糸として、アジア思想を広く概観する。
- 『現代表現論』／現代書やデュシャン、フュースリから現代芸術の起源を探る。それは現代日本の表現を成り立たせている三つの柱（イメージ・キャラクター・ゲーム）につながるという。

展示会

- 『キュレトリアル論』／多様な作品を展示会を通してどのように人に伝えていくのか、作家とのやりとりから展示会をどう構成していくのかを考える。
- 『博物館実習R』／博物館の社会的な役割を踏まえた上で、実際の現場において要求される技術を実践の中で身につける。
- 『美術館教育論』／実際の教育プログラムづくり、美術館教育の意義や理論を、実践演習を通して学ぶ。
- 『美術館展示論』／展示会の企画立案から展示までに必要な基本的な知識と技術を習得する。
- 『美術館経営論』／美術館や展示会は経営という視点でどのように成り立ち、効率的な美術館経営とは何かを考察する。

装飾デザイン

- 『デザイン文明史』／西洋文明と対をなす非西洋文明において、デザインはどのような変遷をたどってきたのか。「プリミティブ・アート」を軸に、美術史と人類学の視点から概観する。
- 『東西デザイン史』／西洋はいかに東洋を発見したか。「西洋」からまなざされてきた「東洋」「東方」「オリент」の歴史的デザインの意味付けを探る。
- 『ユーロ＝アジア美術文明論』／ユーラシア大陸の東端に「日本文化」、西端に「ケルト文化」がある。ユーロ＝アジア世界を東端から眺めるとき、西の端まで「共有されたもの」が明らかになる。
- 『装飾芸術のネットワーク論』／東西の装飾デザインの主役である「文様」「意匠」は、なんらかの象徴的意味をもっている。世界のデザインが共有するものを通して、時代や文化固有の「自然観」や「生命観」を読み解く。

表現

- 『美術普及概論』／美術や表現はどのように人々に伝えられ、共有されていくのか。「みる」という体験に重きを置き、表現の多様なあり方と社会における必要性を検証する。
- 『生涯学習概論』／見学、発表、グループディスカッションを進めながら、生涯学習の現状と課題について考えていく。
- 『素材論』／「素材とは何か」という問いを出発点に、美術の思想と潮流を読み、作品の構造を探求していく。
- 『芸術基礎・制作』／日本画、油画、版画、彫刻。自らが希望する表現科目を選択して基礎から技法を学び、講評会に臨む。
- 『制作と理論』／「芸術」「美術」とは何なのか。研究と演習を同時に進め、手触りのある理論のもとで、多様な美術表現を考察する。

授業名

自然と言語

担当教員 三松幸雄

「わかるんだけど、どこかわからない」を経て、「自分で考えること」へ

「自然と言語」の授業は、「わかるんだけど、どこかわからない」という、ややこしい授業だ。三松幸雄先生が担当するこの授業は、プラトンから始まる哲学や現代思想を各回1項目ずつ取り上げ、学生たちとの会話を交えつつ、最終的にそれらが現代の芸術にどのようなつながっているのかを考えることを目的としたものだ。

この授業は座学が基本だが、取材日は天気よかったです。外に出て校内にある若林奮の「振動尺・傾斜の中の手」という彫刻作品をみんなで見に行った。「この作品には人の手形がいくつか隠されている」という三松先生の話に、学生たちは驚きの声を上げ、それぞれ隠された手形を探し始めた。学生たちは芸術と哲学のつながりを、空間や時間といった哲学的要素に着想を得て制作されたというこの作品から学んだようだった。

授業の一番の特徴は、何といっても、教員と学生との間に対話があるということだ。三松先生は、ことあるごとに学生たちに、「なんかある?」「これに対してどう思う?」と意見を求め、マイクを手に教室中をぐるぐる歩き回る。教室のどこに座っていいようと先生

芸術学科の選択科目の一つである「自然と言語」の授業では、哲学や現代思想をベースに「芸術とは何か?」を紐解いていく。この授業では、「自分で考える」ことが重視され、積極的な態度で授業に参加することが臨まれる。

は必ず、学生たち一人一人のもとにやってくる。個人的な経験でいえば、最初は自分の意見を言うことが恥ずかしくて、的外れなことを言ってしまったらどうしようと思っていたが、次第にそのような気持ちは薄れていった。というのも、学生たちがどのような意見を言ったとしても、先生はそれに対し真摯な態度で対応してくれるからだ。たとえ間違っただことを言ったとしても、非難はされない

し、それに対して真摯に応えてくれる。自分の意見を他人に発信すること、そして、自分のものとは異なる他人の意見を聞くことができるのは、「自然と言語」の授業の醍醐味である。

記事の冒頭で「わかるんだけど、どこかわからない」と書いたが、この両義性は思考の「事柄」そのものに由来するようだ。「事柄それ自身に「わかりやすさ」と「わかりに



文・撮影・レイアウト 大野空暁

くさ」が備わっている。明晰・判明だけでは一面的で、曖昧・混濁などの尺度も不可欠。夢の記憶や微小な知覚では後者が際立つ。それに、明確な理解は経験を一旦完了させるけど、不分明な謎や兆しは新たな探索へと「さなう」と三松先生は語る。理解に収斂する授業ではないからこそ、「この哲学者はこういうことを言っているのかな?」「じゃあ、その思想は現代の芸術に当てはまるだろうか?」などというように、自分の頭でじっくり思考する必要がある。そのおかげで、授業で取り上げられた哲学などの知識の表層的ではない理解が得られるし、それに対する自分の考えを持つことができる。単にわかりやすい授業だったなら、理解はできたとしても、思考するという作業にまではいたっていないかもしれない。この授業は自分でものごとを考える力が身につくし、かつ試される。情報があふれて深く考える余裕がない今の時代において、実はとても大切なことを教えてくれる授業なのではないだろうか。



三松幸雄 (みつまつ・ゆきお) 哲学/芸術 (あるいは、研究/制作)。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程単位取得。明治大学兼任講師/多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師。現代哲学を主要な領域とする学術研究と、芸術の制作実践に内在した実験的活動を行う。近年はとくに詩学/言語芸術、形而上学的な問題群の体系的考察など。

講座名

映像メディア表現

映像表現

担当教員 七里圭



七里圭 (しちり・けい) 一九六七年生まれ。映画監督。多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師。高校時代に制作した八ミリ映画で第八回びあフィルムフェスティバルに入選。助監督時代を経て、数々の作品を監督している。「音から作る映画」プロジェクト(二〇一四〜)など実験的な作品でも知られる。代表作に『眠り姫』などがある。

映像メディア表現(映像表現)は、理論系の芸術学科の中ではやや特殊な部類に属する実技系科目のうちのひとつである。学生たちの手で映像作品を作り上げるのがこの授業。グループワークという共同作業を通して映像の本質に近づいていく。

に映像を能動的に捉え直すことで、映画を「見て楽しむ」コンテンツから「意識的に見る」ものに進化させ、そうした取り組みの中から、映画に対する批評精神やリテラシーが育まれるのである。

この授業では映像制作の実習をメインとしているが、いきなりカメラを構えて撮影するわけではない。この日の授業では、グループワークを通して、映像を作る前段階としてのシナリオ作成の作業を進めた。自分で考えた内容をグループで話し合い、物語の筋を決めていく。それぞれのグループには、もともと仲のいい友人もいればほとんど交流がなかった人たちもいる。彼らといるんなアイデアを出していくなかで、自然と笑顔がこぼれ始める。

「映画は絶対に一人では作れない」

実際に映画監督として現場で仕事をしていた七里圭先生の言葉には、重みがあった。美術は基本的に自分一人で生み出すものだし、高校までの勉強に同じことはいえる。しかしこの授業で必要とされるのは、他者と共同制作を進めることだ。他者と協力する。しかも他者によりかかるとは、お互いの積極性がうまく作用し合うと、作品はおもしろいように変貌を遂げる。当たり前のようで難しい。おそらくは一般社会でもそうである。学生たちは映像制作をすることで、それを自然に学んでいく。

平日の午後が 映画を生み出す現場になる

水曜日の午後、メディアセンター三階。わざわざあいあいとした雰囲気の中、「では、始めます」という七里圭先生の声で授業が始まりました。

出欠確認が終わると、グループで分かれて座った学生たちは皆、パソコンを前に自分たちの映像作品のシナリオについて考え始めた。ある者は斬新さを求めてカメラを一点に

固定して撮ることを思いつき、別の者は些細な場面を撮るのにあえて大きな表現を使うとする。笑いどころを入れようとする学生もいた。設定された課題に、どんなアプローチで挑むか。そんな楽しみがこの授業にはある。

「眠り姫」などの作品で知られる映画監督の七里圭先生が教鞭を執っているこの授業では、「フィクション」というテーマが設定されていた。そこでは、音やセリフ、時間軸など映画を構成する要素に特に重点をおいた制作を、学生たちにさせる。そして、そのよう



自分たちで撮影した映像を確認する学生たち

文・撮影・レイアウト 内田稜真

構想計画設計ゼミ

気鋭の現代美術作家たちと一緒に、一つの展覧会を作り上げる。二〇一九年度からは、ゼミ生による作品制作も活動内容に組み込み、ゼミは新たな境地に踏み出す。

作家への出品依頼からカタログ制作まで

美術家の海老塚耕一教授が指導する構想計画設計ゼミは、「TAMABI VIVANT II」と題した企画展を毎年開催している。昨秋に会場となったのは、本学八王子キャンパス内のアートテーク・ギャラリー。金茂華、構想計画所、諏訪未知、前田精史、町田帆実、村上早の六人・グループの作品が出品された。映



「TAMABI VIVANT II」展会場風景

像、具象、抽象など様式も技法もさまざまな気鋭の作家たちの表現はそれぞれ個性を放ちながらも、研ぎ澄まされた会場の空気の中で絶妙な響き合いを感じさせる。

副題の「Dissemination」散種」という聞き慣れない言葉は、何かを解釈するときの意味が原義を超えて拡散することを説いたフランスの哲学者ジャック・デリダの用語だという。そもそも、「美術・芸術」とはといったいどのようなものなのか。デリダの言葉には、あるいはそんな難解な問いと向き合った際に答えを導き出すヒントがあるのかもしれない。実際に会場に足を運ぶと、キッチンを明るい配色で抽象化して描いたような絵画、体の一部を隠した人や犬を太い輪郭線で描いた銅板彫刻、天井高のあるギャラリー空間の床の上にくつもの黒い四角形パネルを配して小さな円形の金属のオブジェが浮くようにしたインスタレーションなどが、違和感なく共存していた。

「TAMABI VIVANT II」は、作家選びの段階から学生が行なっている。そのための画廊巡りを、海老塚教授と一緒に、ゼミの授業が始まった四月から始めたという。

美術作品を見に行く場所としては美術館が一般的だが、実は画廊やギャラリーは作家と

作品の宝庫である。有能な美術館学芸員は画廊巡りを欠かさず、いいものを見つけては自分が勤めている館のために購入したり、企画展に展示する作品選びの基本情報として自らの脳内リストに蓄積したりしている。しかも、銀座や京橋など東京とその周辺には興味深い作家の作品を扱っている画廊やギャラリーがたくさんある。

ゼミ生は巡っているうちに気になった作家や、自身もともと興味を持っていた作家を展覧会の出品作家の候補として、海老塚教授の前でプレゼンをする。現代美術家でもあり、この世界を知り尽くしている教授と十分な議論を重ねたうえで決めたのが、上記六人・グループの作家だったのだ。

作家への出展依頼、契約、フライヤーやカタログの制作、会場のレイアウト、作品の搬入や搬出など、すべてがゼミ生の仕事だ。作家と接する機会も多く、すべてがかげがえのない経験になる。

一方で、「保険に入るための手続きは、サイズや素材をはじめとすると細かな情報が必要で、まとめるのがとても大変だった」とゼミ生三年の外田夕佳さんは話す。地道で細かな作業も多い。展覧会がどんな努力のもとに制作されているのかを、ゼミ

担当教員
海老塚耕一 (本学芸術学科教授)
(えびづか・こういち) 1951年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院修了。『第6回インド・トリエンナーレ』ゴールド・メダル、『第4回アジア・アート・ビエンナーレ』、バングラーデッシュ』最優秀作家賞、第15回平柳田中賞、『第19回サンパウロビエンナーレ』、『第19回現代日本彫刻展』神奈川県立近代美術館賞、FOCUS 2002『結界 海老塚耕一展』神奈川県民ギャラリー、高島屋文化賞、等々多数受賞。



「TAMABI select」展のミーティング風景。右端が海老塚耕一教授

フィールドワーク設計ゼミ

企画出しに頭を悩ませながら机に向かう姿はまるで本物の編集者のよう。取材、撮影、執筆にレイアウト…そして配布まで。五人のゼミ生たちは一致団結して雑誌を作り上げる。

「出版社と同じ経験をする」がコンセプト

ようやくセーターが恋しくなってきた十月初旬。そろそろ三限が始まるのかという頃に、芸術学棟四階「フィールドワーク設計ゼミ」のゼミ室を訪ねた。「あれ、まだいらっやかってないね」「そうだね」空室を覗きながら取材班がしばらく待っていると、初めに担当の小川敦生教授がやって来た。

「ゼミ生たちはまだ来てませんか」その言葉にうなずくと、物腰の柔らかな雰囲気で大ハハ、と笑う。そのすぐ後にゼミ生たちも集まり、真ん中にある白い机を囲むように各々定位置に座った。ゼミを取り巻く空気はゆったりとしていた。

担当教員
小川敦生 (本芸術学科教授)
(おがわ・あつお) 1959年福岡県生まれ。東京大学文学部美術史学科卒。日経マグロウヒル社(現・日経BP社)入社。週刊「日経エンタテインメント」誌記者としてクラシック音楽と洋楽を担当。その後、月刊「日経アート」誌編集長を経て日本経済新聞社文化部へ。「美の美 パウル・クレー 色彩と線の交響楽」「美の美 画鬼、河鍋曉斎」「瀬戸内芸術祭 写真で巡る「鳥とアートと海の旅」」など多くの記事を執筆。2012年本学芸術学科教授に。現在も、音楽之友社のウェブマガジンONTOMOのコラム「アートな“らくがき帳”」等の執筆を続けている。



卓上に並べられた『Whoops!』

フィールドワーク設計ゼミでは、制作の全てを学生が手掛けるアート誌『Whoops!』の発行を年三回行っている。

取材した日はちょうど二〇一九年秋号の校了を迎えたタイミングだったが、休む間もなく冬号に向けた企画会議の真っ最中であった。

「締め切りは守りましょう」企画会議最初の議題は秋号の反省から。「日経アート」誌で編集長を務めた経験のある小川教授の言葉には実感がこもっている。

「十月中にアポと取材をしたほうがいい。十一月中に中身が出来れば、十二月中に修正と校正ができる。早くやればやるほど内容を詰められます」パソコンでカレンダーを表示しながらゼミ生たちに今後の予定を説明していく。ふと壁

に貼ってある紙を見れば、「Dead line」という綴りの下に「死め切り」の文字。

「一般の出版社と同じ経験をしてもらいたい」という小川教授の思いはゼミ生にしっかりと伝わっていた。さながら本物の編集部であるかのようだ。

会議が中盤に差し掛かった所で、次号の企画のネタを育てる場面へ。三年生の須山琴巴さんがニューヨークへ行ってきたという事で、ニューヨークの街並みが話題に上った。須山さんは秋号でも「特集 海外へ」の中で、メトロポリタン美術館で行われたフアッションの展覧会の記事を執筆している。フィールドワークの名にふさわしく、ゼミ生たちは学外に出て取材を行う。秋号では日本をも飛び出してしまったということだ。

そんな須山さんが出したネタは、ハンドソニヤードにある「VESSEL」という建築物だ。「形が蜂の巣みたいになってるんですけど」「登って、降りるだけ。映えだけ」実際の様子を話す須山さんの話にうなずきながら、その場にいる全員で話を展開していく。

「映え特集とかいいんじゃないですか」アートに関係していれば、『Whoops!』はどんなジャンルでも幅広く取り上げる。小川教授は面白いですね、と言いつつ「流行りすぎてしまうものだからもう一ひねり欲しい」と鋭い指摘を飛ばした。すると、「金魚ミュージアムをやっているアートアクアリウムとか」「韓国のDDP(東大門デザインプラザ)は？」など、ゼミ生たちは頭を悩ませながら次々にアイデアを出す。

この日は企画の芽を育てる段階だったが、大変なのはここからだ。アポ、取材、誌面デザイン、印刷の依頼、配布など、やるべきことは盛りだくさんの中で「死め切り」は必ず待っている。小川教授は「来週までに素晴ら

生たちはこうして実体験で知るのである。二〇一八年度は「TAMABI select」と題した、本学の実技学科と共同で開催する展覧会の企画・運営にも携わった。美術家の卵が多くなる学内の実技の学科と接点でき、実際に彼らの作品を展覧会で扱う作業は、極めて有意義である。

二〇一九年度からは、作品の制作をゼミの活動内容に組み込む。「制作の表現と展示の表現がぶつかり合うことで、新しい表現が生み出される」と海老塚教授は言う。芸術学科は美術史や批評などを根底に据えた理論の学科だが、ゼミ生が作家としての体験を加えることで、「つくる」「考える」「伝える」という芸術学科の理念を実践する類例のないゼミになりそうだ。

*この記事は、本誌2019年版に掲載された記事を再掲載したものです。



卒業した先輩ゼミ生たちの仕事に学ぶためにバックナンバーを読むゼミ生たち

しいアイデアが生まれるでしょう」と微笑んでいた。ゼミの魅力を訊くと、三年生の宮北幸咲さんが答えてくれた。「企画、レイアウト…全部やっている。取材相手と連絡を取ったり、取材をしたりするのは緊張するけど、社会に出たときに役に立つはず」雑誌制作は大変だが、やりがいを感じるのだそう。色々な分野の人に会えたり、PCの技術も上がったりするのだと他のゼミ生も教えてくれた。

取材・文・レイアウト 三津田恵
撮影 島崎亜美

展覧会設計ゼミ

キュレーターの家村珠代教授が担当する展覧会設計ゼミでは、文字通り展覧会を「設計」し、開催する。現場はどうなっているのか。同ゼミでTA（ティーチング・アシスタント）を務める
本学大学院修士課程芸術学専攻一年の内藤和音さんに寄稿してもらった。

作家、学生、教員らが互いに考え、思い描き、形作る展覧会

展覧会設計ゼミでは毎年、「家村ゼミ展」を開催している。三回目を数えた昨年の展覧会は「日高理恵子 村瀬恭子 吉澤美香 ドロイニングから」と題し、絵画を対象としながらも制作に対する考え方、技法、素材が全く違う三人の作家とゼミ生と家村珠代教授の協働で、展覧会を作り上げた。たまたまではあるが、作家は三人とも本学絵画学科油画専攻の教員だ。

展覧会タイトルにある「ドロイニングから」とは、絵画作品における本画と下絵の関係性について、下絵のことを「ドロイニング」と呼び、三作家それぞれのドロイニングのありようを捉えようとの意図を込めた言葉である。

「絵画作品の基となるドロイニングには、作家の思考、身体性や感覚が無垢なままに（溢れんばかりに）詰まっています。本展は絵画の一手前に遡り、ドロイニングから、絵画の生成を再考しようとするものです」（家村ゼミ展2019）ウェブサイトより）さて、「ドロイニングから絵画の生成を再考」するためにまず行ったのが、各作家が用いる素材を使った、ゼミ生の制作体験だ。と



「家村ゼミ展」（2019年10月開催）の準備作業風景

はいっても、技法や画材などの使い方は作家の「企業秘密」なので手取り足取り教えてもらえるわけではなく、全く同じように制作することはできない。だが、とにかく想像力を働かせて制作方法を想像しながら、技法の再現を試みた。

その後、作家・ゼミ生・家村教授などが集まり、実際に作品を見ながら意見を交換したほか、作家自身の声を聞く、「研究会」と呼ばれる会を開催した。「研究会」は、通常であれば揃って作品について語り合うことのない三作家が一堂に会して互いの作品について意見を交換する稀有な場になった。

研究会の後、三作家とともに会場となる本学八王子キャンパスのアートテークギャラリーを訪れ、どのように展示するのか、フロアプラン（展示計画）の原案を練った。それまで、紙の上で真つさらな展示図面を見ながら作品の配置について話すことはあつたが、実際に会場を見ると、一気に構想が膨らんだ。

会場となるアートテークギャラリーの一階には、大きく分けて四つの部屋がある。まずは最初の部屋に誰の作品から展示するか。全員で熟慮し、日高理恵子さんの作品に決まった。どれほど真つさらな会場図の前で頭を捻らせても決まらないものでも、実際に会場を訪れて、一つでも作品の位置が決まると、あとは、ほとんど拍子に作品の配置が決まってしまう。

その後、今度はゼミ生が主体となって、出品が確定した作品の画像、タイトル（時として英語名も）、サイズ、素材、展示作業をする際の具体的な方法等の情報を収集する。展覧会を作る上で屋台骨となる情報である。これらは会場で作品の横に掲示される解説板や



最初の部屋には日高理恵子さんの作品が並んだ



村瀬恭子さんと吉澤美香さんの作品が展示されたコーナー

映像文化設計ゼミ

星の数ほどある映画を手当たり次第探っていく。鑑賞者としての映画、企画者としての映画、撮影者としての映画、撮影者としての映画、三通りの映画体験を踏み台に、新たな映像文化史を切り開く。

スクリーンの向こう側に 行く、知る、伝える

芸術学棟の螺旋階段を登ると、一つの暗い部屋が目につく。暗幕仕様の黒く重いカーテンをめくると、そこには大きなスクリーン、使い古されたソファ、千を超えるDVDが並ぶ棚……。毎週金曜日、古き映画館さながらのこの小さな部屋に十名の学生がやや遅刻気味に、しかしゆつたりとした歩みで入っていく。映画鑑賞後の余韻に浸っているのだろう。

一つの机を丸く囲むように座る学生らは、口々に「企画」について話し始める。前任の西嶋憲生氏が「金曜 cinémathèque」の名の下に続けてきた映画上映会を、二〇一九年度より



田口トモロヲ氏講演会の様子（*）

新任の金子遊准教授が引き継ぎ、月に一、二度開催してきた。今年の上映会だけでなく、映画にまつわる様々な企画イベントも開催。「ゼミ生の将来に繋がるような活動をしていきたい」という金子准教授の思いもあり、各イベントにはゲストとして、映像文化史に何らかの形で関わっている人物をお呼びしているが、その際は企画主催のゼミ生が直接アポを取る。それは「仕事体験」でもある。これまで呼んだゲストには実験映画の第一人者・奥山順市氏、映画監督・本田孝義氏、映画プロデューサー・市山尚三氏、コマ撮りアニメーション作家・村田朋泰氏などジャンルは幅広く、他学科の学生や一般来場者の方にも楽しんでいただけるようなイベント作りを目指している。九月には一大イベントとして『鉄男』公開三十周年を記念し、俳優の田口トモロヲ氏を講師に講演会も開いた。監督・演者・そして鑑賞者と、多方面から映画を見続けてきた田口氏の講演は本大学レクチャーホールが溢れるほどの集客数で、本人私物を手渡してプレゼントする企画では会場外まで歓声が聞こえる盛況ぶりであった。今こそ俳優としてその名を馳せている田口氏だが、学生時代は引越しの多い家庭に育った影響でいじめなどを経験し、自身でも暗黒期と呼ぶほど暗く辛い生活を送っていたそう。どこにも居場所がない中で逃げ込んだ映画館



池間島での撮影風景。カメラに映る広大な海に魅せられるゼミ生

の暗闇、そこで仕方なく出会うことになった映画という媒体の中で、今ではなくてはならない名バイプレイヤーとして活躍しているというわけだ。美術の道に進んできた以上、特殊・異端と見られ心理的な孤立の経験を持ちながら生きてきた学生も多く、田口氏の話を聞きながら聞く人もいた。こういったゲスト自身のバックグラウンドを生む声で聞くことができるのも、映像文化設計ゼミの企画の魅力だ。「準備には追われますが、映画好きとして嬉しい体験ばかりです。映画をただ見るだけではなく、その裏側に何があるのか、イベントを通じて多くの人に知って貰いたいです」ゼミ生の門脇さんは赤入れ済みの企画書を手を、笑顔でこう語る。

新体制でスタートして初のゼミ旅行は、金子准教授のかねてからの希望があり、はるばる沖縄県・池間島を訪れたそう。十月下旬の池間島はすっかり夏を忘れた都会の雑踏をよそに、青々と茂る草原に波の音が柔らかに流

れ、全く別の世界線にいるような心地だったという。現地出身者であり、詩人として活動している伊良波盛男氏を案内人として迎え、「ミヤークツツ」というお祭りを鑑賞した。

元よりドキュメンタリー映画監督として活躍している金子准教授直々の指導のもと、ゼミ生達はその様子を映像に収めた。今年度のゼミの履修者は写真を専門に勉学に励む学生が多いというが、カメラを触る楽しさは映画も同じ。「動く写真」の面白さに引き込まれていったという。「今まで映画は観ることで楽しんでいたというが、これを機に誰かがこの映画を撮っているという事実を意識するようになった」とゼミ生の鈴木さんは語る。映画は時代の写し鏡。スクリーンの向こう側に、同じ時代を過ごした誰かが座っている。観るだけでなく、感じたことや疑問を胸からのスクリーンの景色を他者へ伝え、その体験の場を提供する。このアプローチこそ、映像文化史設計ゼミの活動そのものである。

取材・文・レイアウト 小林りの
撮影 井上優（*）、鈴木彩加

担当教員

金子遊（本芸術学科准教授）

（かねこ・ゆう）1974年埼玉県生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業。映像作家・放送作家を経て、現在は映像、文学、フォークロアを領域横断的に研究する。専門はアートフィルム、ドキュメンタリー、ワールドシネマ。評論『弧状の島々』『ソークロフとネフスキー』で三田文学新人賞（評論部門）、『映像の境界』でサントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞。映画雑誌の編集委員、映画祭ディレクターも務めており、2018年より東京ドキュメンタリー映画祭プログラム・ディレクターに就任。

担当教員

家村珠代（本芸術学科教授）

（いえむら・たまよ）東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究芸術学専攻博士課程修了。インディペンデント・キュレーター。1991～2009年目黒区美術館学芸員。手がけた企画展に『1953年ライトアップー新しい戦後美術像が見えてきた』展（1996年、目黒区美術館）、『小林孝匡展ー終わらない夏』（2004年、目黒区美術館）、『家村珠代連続企画*ひとり』Vol.1. 袴田京太郎』展（2005年、GALLERY MAKI）、『丸山直文展ー後ろの正面』（2008年、目黒区美術館）など。

来場者に配られる資料に掲載されるほか、展示期間中に作品にかける保険額の算定基準になり、さらには作品が展示室入り口の間口を通るかどうかな等を事前に確かめるための情報にもなる。「夢と現^{ユメとイマ}」ではないが、ゼミで行っている展覧会の制作には、かように想像力や発想を膨らませること、現実的に展覧会を形にするための抜け目のない作業が必要となる。素晴らしい作家の方々と触れ合いながら、こうした作業ができるのは、実に稀有な体験である。

装飾デザイン調査設計ゼミ

学生たちは各々が探求するテーマを発表し合う。仲間からの助言に向き合うことで得られる導きの一つ一つが研究を牽引する。



鶴岡真弓教授（手前右）の河合隼雄学芸賞受賞の記念にゼミ生から送られた花束とともに

過去を見て未来をつむぐ

このゼミでは、学生は研究成果を発表し、鶴岡真弓教授はもとより、ゼミ生の皆から質問や意見をもらうことで内容を練磨させていく。「好きなことを研究してほしい」という鶴岡教授の方針もあり、雰囲気はとてもリラックスしている。

「鳥居」をテーマに研究しているゼミ長の平澤直之さんは、「自分の足で稼ぐ」ことが大切」と言う。特に民俗学関係の研究は、文献だけでなく実際に関連のある土地に出かけ、残っているものや風習を見たり聞き取り調査をしたりするフィールドワークがものをいう。平澤さんはそれゆえ、時間を見つけては各地の神社に赴いているという。

授業の合間を縫って足を運ぶためのスケジュールを組むのはとにかく大変だ。その中で最近出かけたのが、鳥根県の出雲大社だった。出雲大社には、コンクリート・木・鉄・銅でできた四つの大きな鳥居がある。出雲大社は日本という国の誕生にまつわる歴史的な神社だが、大正時代にできた、歴史的には極めて新しいコンクリート製の鳥居にも、現在まで脈々とその伝統が息づいている。

平澤さんのもとと建築、インテリアに興味があり、装飾デザインを研究する鶴岡教授



授業風景

のゼミに入ったという。鳥居は建築物であり、装飾的な要素も備えている。発表した時、「しめ縄はどうやって作るのか」といった純粋な質問を受けた。このような基本的な質問はありがたいと、平澤さんは言う。

研究というと個人でやっている印象が強いが、実はこうしたゼミの場で教授とゼミの仲間たちの様々な声を聞くことで、大きな広がりを持って進んで行けるのだ。

ある秋の午後、装飾デザイン調査設計ゼミの発表取材した。その日の発表者は二人の四年生。一人目の小野暢久さんのテーマは「パウル・クレーの線描画『線』の造形論と版画技法の関連」だった。独自の切り口での研究に感心した。クレーについてはドイツ語の文献が多いため、「日々の研究は語学と根気よく向き合う精神力との戦い」と小野さんは

アーカイヴ設計ゼミ

研究テーマを自由に決め、文献を読み解き、成果を発表し共有することで知見を深める。そして一二〇〇〇字の論考をまとめる。

書物を読み、発表し、文章を「書く」ことで自らの「アーカイヴ」を豊かにする

ある火曜日の午後、芸術学棟四階奥にあるアーカイヴ設計ゼミのゼミ室に向かった。安藤礼二教授に中へ案内されると、学生たちはソファアに座ったり、雑談をしたりしながら授業の開始に備えていた。

やがて、ゼミ生の発表が始まった。この日の発表者は、四年生の彭信文さん。安藤教授の研究テーマと自分の知りたいことが合致したのが、このゼミに入った最大の理由という。発表の内容は、民俗学者、国文学者、詩人、歌人として二十世紀の学問や芸術の世界に大きな足跡を残した折口信夫の著書『大嘗祭の本義』について。大嘗祭とは日本の天皇が皇位継承に際して行う宮中祭祀のことだ。彭さんは寿詞、警備、風俗歌、御祝、お湯直会などについて、細かく考察を進める後半部分を丁寧に読み解き、発表を進めた。

「大嘗祭に奏上される寿詞について、その由来、内容について触れていきます。まずは寿詞の意義について解説します。寿詞とは服従を誓うとき、すなわち、自分の守り魂を祭



安藤教授と講義を受けるゼミ生たち（*）

るときに、唱える言葉です」

安藤教授が彭さんの説明を補足しながら、発表は進行していく。「天皇は何よりも言葉と魂を重要視します。大嘗祭では食べ物を食べますが、食べることと言葉を捧げることが等しいんです。だから、自分の守り魂を祭るときに言葉も一緒に捧げるんですよ」発表の内容に関してわかりやすくアドバイスする安藤教授の引き出しの多さに驚かされた。

アーカイヴ設計ゼミでは、年度の終わりにゼミ生の論考をまとめた『Expression』という書籍を作る。それぞれがテーマを決め、一二〇〇〇字の文章を書き上げるのだ。テーマは民俗学以外からでも自由に選択できる。二〇一九年度の同書を見ると「ディオニュソスと悲劇に対するニーチェの考察について」「吸血鬼と美少年山本タカトについて」「浮世絵サブカルチャーがハイアートになるまで」など内容は幅広い。

「この論考で一二〇〇〇字分の『貯金』ができるので、四年生の卒業論文に生かすことができます。文章をそのまま使わないとしても、下地にして研究を深められます」と四年生の豊島留南さんは話す。

「長い文章を書き上げるために、他のゼミ生の文章や、折口信夫の長い本をみながら読むと、書物という「記憶媒体」（＝アーカイヴ）を読むことが文章を書く力につながり、その『書く』という行為によって自身の記憶装置（＝アーカイヴ）を豊かにできる」と安藤教授は話す。

夏には、毎年ゼミ旅行に出かけている。授業との関連から、たいしては「聖地巡礼」の旅になる。伊勢神宮や東大寺の大仏などを見るために、これまで奈良、三重、沖縄など日本各地を巡ってきた。昨年は青森県の三内丸山遺跡や恐山を訪れた。三内丸山遺跡は、縄文時代前期中頃から中期末葉の大規模集落跡。復元された住居などの中で古代に思いを馳せるのは、東京の博物館で土器を見ることがとまったく異なる経験になる。遺跡に隣接する青森県立美術館では、シャガールがパレエ「アレコ」の背景画として描いた巨大な作品四点が高さ二十メートルの大空間に展示されていた。欧州で活動していたシャガールが第二次大戦中に難を逃れて滞在していた米

苦笑した。

二人目の鈴木尚子さんのテーマは、「あお—その深遠と神秘性の究明—」。かつて在籍していた大学で専攻したテキストを軸にした研究内容だ。青という色に関して、「自らの意識下において青は色を超越した存在」という考えを軸に置き、特別な神秘性を感じて自ら製作した作品を紹介しつつ発表を進めた。その中で度々出てきたのが、「再生」や「循環」という言葉だ。「世界の様々な文様には、根底に生命循環が込められている」と語る鶴岡真弓教授との間で繰り広げられた熱い議論が印象的だった。

研究と発表で練り上げ卒業論文を書き上げるため、鶴岡教授のみならずゼミ生同士で行われる批評も熱が入る。口頭で伝えるだけでなくアドボイスや質問を記入する「批評シート」を用いた意見交換が行われる。発表と意見交換によって研究内容の充実や新たな視点の発見がある興味深い方法を目撃できた。

取材・文・レイアウト＝前山未来、

撮影＝装飾デザイン調査設計ゼミ、

森田智裕

担当教員

鶴岡真弓（本学芸術学科教授）

（つるか・まゆみ）本学芸術人類学研究所長。美術文明史家。早稲田大学大学院修了後、アイルランド・ダブリン大学トリニティ・カレッジに留学。ケルト芸術文化&ヨーロッパ・中央アジア・日本に至る「ユーロ＝アジア世界」の装飾デザイン交流史を研究。著書に『ケルト/装飾的思考』『装飾する魂』『ケルト美術』『ケルトの歴史』『阿修羅のジュエリー』、訳書に『ケルズの書』など多数。企画した展覧会に2018年多摩アートテーク『始まりの線刻画』。ドキュメンタリー映画『地球交響曲・第1番』でアイルランドの歌姫エンヤと共演。2018年、『ケルト 再生の思想—ハロウィンからの生命循環』で第6回河合隼雄学芸賞。



恐山にて（写真提供＝アーカイヴ設計ゼミ）

で描いた意義深い作品だ。同館はもともと四点のうち三点を所蔵。残りの一点を米国の美術館から借りることができ、ゼミ生にとって は全点が揃った空間に身をうずめることができる貴重な体験となった。

取材・文・撮影（*）＝レイアウト
＝齋藤匠磨

担当教員

安藤礼二（本学芸術学科教授）

（あんどう・れいじ）1967年、東京都生まれ。文芸評論家。大学時代の専攻は考古学。2002年、『神々の闘争—折口信夫論』で群像新人文芸賞評論部門優秀作を受賞。日本近代思想史、民俗学などをベースに評論活動始める。『神々の闘争—折口信夫論』で05年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。14年に刊行した『折口信夫』が翌年、第13回角川財団学芸賞と第37回サントリー学芸賞を受賞。その他に著書として『大拙』『列島祝祭論』『迷宮と宇宙』など、編著書として『初稿・死者の書』、編集協力書として『西田幾太郎』『鈴木大拙』『空海』など多数。『言語と呪術』には監修、翻訳、解説で参加。

書物設計ゼミ

多くの人との協力で生み出されている本。
書物設計ゼミでは、著者だけでなくデザイナーや印刷製本担当者など一般社会では多くの人が介在する書物の制作の可能な限りの部分をゼミで体験しつつ書物のあり方を考える。

人と人をつなげていく
「本」の魅力

書物設計ゼミの真髄は、本を作ることにある。では、その「本」を作るといふのはどういうことだろうか。本は必ずと言っていいほど多くの人や組織の協力があって初めて世に出、人々の手の中に収まる。多くの場合、著者と読者の間に編集や印刷やブックデザイン、営業などに携わる人々の手が入る。一方、仲間内で出版される同人誌も存在する。明治時代に硯友社から出された俳句や小説をまとめた『我楽多文庫』をはじめ、現代にいたる

まで根強く残っている。そして多摩美芸術学科においても独自の文化がある。では書物設計ゼミは本づくりにどうアプローチしているのだろうか。

作家・詩人・批評家として活動している平出隆教授の指導の下、このゼミで毎年出して



ゼミの研修旅行では京都でコロタイプ印刷を体験した

いる本がある。書名は『10の図書館』、小説や詩のみならず映画や漫画、人物が残した言葉など、ゼミ生が一人一つのテーマをもとに様々な創作物から十冊を選び、それらに関して評論をする。例えば「正岡子規の意味の分かる俳句10選」や「スピルバーグが監督した映画10選」といった具合だ。学生らはテーマのもとに選定した十のものにそれぞれの考えを綴っていく。十の作品それぞれの内容を要約し批評したもの、「エモイ」に代表される若者言葉で述べたもの、ただ単に紹介したもの、短いものや長いもの、そこには十人十色の思いがあり、そして自由な批評が綴られている。

こだわりはそこだけではない。この『10の図書館』は出る年度によって本の書式や装幀も異なる。初めて出た二〇〇二年はシンプルなものだったが年度によってはページの端に色が付いていたり、年度によっては文章が縦や横に書かれていたり、実験的な要素も入っている。そうした変化を見るのもなかなか面白い。本が出るまでには多くの人の協力があると先述したが、平出ゼミで出している『10の図書館』はそのほとんどの工程がゼミの中で完結しており、こうした実験的な様々な形式の本が出せるのである。

ゼミに所属する三年生の菅原輝夢さんはゼミを履修した動機に関して、「本というもののあり方が変わっていく中でこのゼミに出会い、学びたいと思った」と語ってくれた。もともと本を読むのが好きな菅原さんは小さなころから図書館にもよく通っていたが、昨今多くなった電子書籍をはじめ、既存の形態にとられない出版方法が増えていると感じた中で、このゼミに出会ったという。またこれとは別に、以前在籍していた先輩が残していたものを自身がつなぐことにやりがいを感じ



本学八王子キャンパスのアートテーク・ギャラリーで開かれた「河原温 ブックアート・コレクション創設記念展」(2019年12月)では、ゼミ生が展示作業を行った

美術史設計ゼミ

原文と翻訳文、ダブルの講読。
さらに徹底したレクチャーによって美術史の世界に足を踏み入れる。
一歩進んだ、深みへ。

「知」と向き合い
「理」を解する

月曜三、四限、芸術学科棟四階、一番奥の401教室に集まる学生たち。和気あいあいと、チャイムが鳴るのを待つ。その後少しして、マグカップを持った大島徹也先生が登場した。「それでは始めましょうか」ちよっとした日常会話と近況報告を皮切りに、美術史設計ゼミが始まる。前半は大島先生によるレクチャーだ。取材当日のテーマは、「モダニズム」とは何なのか。鍵となる四人の美術批評家について、それぞれの考え方を時代考証も踏まえ学んでいく。二十世紀を代表し、一つの基準ともいえる存在感を見せる批評家クレメント・グリーンバーク。その同世代で、

グリーンバークとは対立した意見を持ち論争を起したハロルド・ローゼンバーク。さらにはグリーンバークの批判的継承者ともいえるマイケル・フリード。後のポストモダニズム派として確立した美術史家、美術批評家のロザリンド・クラウス。大島先生の専門分野でもある二十世紀の美術家、ジャクソン・ポロックを引き合いに、四人それぞれの批評の内容や違いを学ぶ。一口に批評といっても、そのスタンスは様々だ。それぞれに、めぐるべく現代美術史の世界が広がっている。授業が始まる前の和やかな雰囲気とは一転して、先生の声に耳を傾けながら資料に目を通す学生たちのまなざしは真剣そのもの。ノートを取り、ページをめくる音とペンの走る音が響く。集中のあまり、紙を押さえる手にも力が入る。



ゼミの授業風景

ものが異なる場合も多くある。「art」というたった三文字の単語も、語源から丁寧にひも解いていく。とことん深く知識と理解を追求する姿勢はまさにアカデミックといえよう。勉強以外の、美術史設計ゼミの「素」の姿はどういったものなのか。「ゼミ全体としては、近すぎず遠すぎず、といった距離感」とやや控えめに答えるゼミ生たち。各々の意思を尊重した、メリハリのある雰囲気だ。ゼミに所属している学生以外に、美術史に興味のある学生が部屋を覗きに來ることもある。

担当である大島先生は二〇一九年度より多摩美芸術学科に着任したばかり。そのため、まだなかなか大島先生の人物像をつかみ切れていない学生も多い。ゼミ生だからこそ知る先生の魅力は？「笑顔が素敵！」「わりといろいろな話をします。若いころは自転車で画廊巡りをしていった話とか」「面倒見がとてもいい」と様々な答えが出てくる。中でもゼミ生が口をそろえて言うのは「とにかく丁寧」という言葉だった。「本当にわかりやすく説明してもらえます。アカデミックな美術史、と聞くとも身構えてしまうかもしれませんが、決してハードルの高いものではありません」「学生が学ぶことを一番に応援してくれる先生です」力強くうなずくゼミ生たち。三年生の土屋早紀子さんは「全然わからなかったことがわかる喜びがあります。充実した時間を過ごせます」とゼミの魅力を語る。『学び』を何よりも大切にする姿勢は、美術史に限らず多くのことに通じるものだろう。広く、深い美術史の世界。得られるものは底知れない。

担当教員

大島徹也 (本芸術学科教授)

(おおしま・てつや) 1973年愛知県生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。東京大学大学院修士課程修了。ニューヨーク市立大学グラデュエートセンター博士課程修了。博士(美術史)。愛知県美術館主任学芸員、広島大学大学院准教授を経て現職。主な共著に『Is ont regardé Matisse』(2009)。主な展覧会企画/監修に「生誕100年ジャクソン・ポロック展」(愛知県美術館・東京国立近代美術館、2011~12年)、「バーネット・ニューマン」展(MIHO MUSEUM、2015年)。第11回鹿島美術財団賞、第7回西洋美術振興財団賞・学術賞受賞。



大島准教授

後半は資料の講読。前半にも登場した、グリーンバークの批評選集を読み進めた。これまで美術史設計ゼミの伝統としては、徹底した原書講読がメインだったが、大島ゼミでは理解を深めるために、翻訳文の講読を行っている。「原文がもちろん最も重要ですが、まずは母国語でしっかりと内容理解をしてもらいたいという思いがあります。実際に理解をしながら、という姿勢です」と大島先生は話す。文章内の小さな引っかけも逃さない。重要なキーワードを、雑学を交えて掘り下げる。「…では、ここで出てきた絵画作品のフォーム、とはどんなものだと思う？」「うーん、構図？」「素材、とか」といった具合に、時折学生へ質問をし、考えを深める。一対多のレクチャーであると同時に、一対一の対話でもあるのだ。また、原文と翻訳文を比較し、訳し分けにも注目する。原文と翻訳文、二種類の講読ならでのことである。同じ単語であっても、文脈によって指し示す

取材：島崎亜美、三津田恵
文・レイアウト：島崎亜美
撮影：三津田恵

非常勤講師の“お供”

専任教員に続いて本学非常勤講師の先生方の“お供”を紹介する。アンケート調査で得たのは、個性的な答えばかり。非常勤講師の先生方とは、普段授業を受けていても勉強以外のことを話す機会が少ないため、この企画が学生との距離が縮まきっかけになればいいなと思った。

《グンゼのレギンスパンツ・家着》

「そのまま外に出てもバレません。下着メーカーなので肌触り、伸縮性もよい」(小原真史=現代美術論)

《Steam (パソコン用のゲームプラットフォーム)》

「私は怠惰な人間なので、朝はなかなか仕事をする気になれません。だからゲームが必須です。毎朝ゲームの続きを遊びたいという動機でパソコンの前に座り、その流れでなし崩し的に仕事を始めるのです」(松下哲也=現代表現論)

《鉱物的なもの》

「特に詳しい知識があるわけではないのですが、鉱物を扱うお店に行くと、日常を離れた別世界に触れることができ楽しくなります。空や水(特に川)を見るのも好きですが、私にとって、空や水は鉱物の変容態です。そういうものに、私はなにか非人間的な純粋さを感じているのだと思います」(川瀬智之=美学特論)

《ボトルガム (ロッチ「キシリトールガム〈ライムミント〉)》

「仕事中ずっと噛んでいる」(野田尚稔=美術館経営論、研究と展示)

学生・院生の“お供”

アンケート調査を実施した「学生・院生部門」では、意外にも一部の“お供”に結果が集中したので、まずTop3を報告。()には、回答者の名前=実名、仮名、ペンネームなどを記した。さて、栄えある1位に輝いたのは!

1位=《芸術学棟の並びにある多摩美名門パン屋のパン》

焼き立てで種類も多く、毎日内容が変わるため「今日はどんなパンが並んでいるのか」と日々期待する。「芸術学棟から距離が近い」(レイチェル、ひっかなど)、「暖かいスープの提供」(ささき)、「一番の逃げ場所だから」(びび) など多くのコメントをもらった。

2位=《iPad》

芸術学科では、入学時に全学生にiPadを配布している。フィールドワークやグループ活動のコミュニケーションツール、調査・検索ツール、プレゼンテーションツールとして、またゼミの調査発表・コミュニケーション、レポート執筆等のツールとして、日常的に活用されている。「課題」「ノート・書類整理」「絵を描くこと」(マリ山、無記名)といった理由が目をつけた。

3位=《のど飴・ミントタブレット・ラムネ》

口に含ませるものをまとめて3位とした。「授業中お腹が減った時に食べます」(ソソ)、 「量が減ってくると音がなるのが難点ですが糖分補給に最適、喉を酷使するため」(蘭子)、「気分がスッキリする」(無記名)、「毎回5~6粒ずつ一気に食べるので消費が早い」(無記名)。長時間の授業中、気分転換あるいは口の中が寂しい時に必須な“お供”だと考えられる。全国でも共感する学生は多そうだ。



with

安藤礼二先生 with 超朝型生活

自他共に認める超朝型の安藤先生。明け方の三時、四時ごろに起床し、諸々の仕事や作業を行う。自宅近くをウォーキング、散歩することも。「夜明けと共に起きて、夜は早くに寝る。特に意識しているわけではなく、このリズムが心地よいため自然と馴染んだなあ」元々は夜型生活だったが、本学芸術学科に来てから朝方生活に変化した。明け方の時間だと、気力や体力もあるため、仕事をしていても集中しやすいそう。「リラックスできる時間や場所ってとても大切。皆も自然体でいられる場所を見つけて欲しい」ちなみに、起床の順番は安藤先生、ポーちゃん(愛猫)、奥様の順なのだとか。



鶴岡真弓先生 with 渦巻き・防寒具

白地に唐草文様の青い線が映えるマグカップ。「渦巻き文様をきっかけにケルト研究を始めたので、どうしても渦巻き風のデザインの雑貨に心惹かれます」クッションや自宅の壁紙にも渦巻き柄が多いそう。フィールドワークのために、服装は安全で動きやすいものを選んで。「本当はヒールとかも履きたいのだけど」と言いながら、白いブーツを見せてくれた。常に鞆に入っているのは、防寒具。夏は好きだが、冬の寒さは苦手。ひざ掛けやマフラーが欠かせない。「人間がものを使っていると思われがちですが、むしろあらゆるものが人間を支え、命を守ってくれていると思っています」



小川敦生先生 with オリジナルグッズ

iPadでオリジナルイラストを生み出す「ラクガキスト」の顔を持つ小川先生。自身で描いたイラストをあしらったオリジナルTシャツやスマホケースが“お供”。イラストは思い立ったときに描く。仕事で忙しい時ほど「思い立つ」ことが多いという。絵を描き始めたのは八年ほど前から。最初は人に見せることには恥ずかしさもあったが、「ある時、開き直りました」。家族からは不評というが、イラスト掲載を条件にウェブマガジンの連載依頼が来たことも。「絵は素晴らしいものだ、と描いてみて改めてわかりました。上手い下手、ではなく己の中から湧き上がるものを描くことが一番だと思います」



平出隆先生 with バット

平出先生は、地元の野球チームに参加するほど、大の野球好き。そんな先生の“お供”は野球のバットだ。教室にはたくさんの本とともに数本のバットが常駐している。中には自身の著書に登場したのも。ご自宅にも六、七本のバットがあるそうで、「自然と増えていくね」と笑う。取材時は平出先生の誕生日が近く、「友人からバットが贈られたばかり」だった。「バットとボールの出会いによって、人々は沸き、喜びが生まれる。野をひらくバットは魔法の杖のようでもある」ちなみにポジションはサード担当。ボールが飛んでくると子どもが走ってきたかのようなうれしさを感じるそうだ。



金子遊先生 with オー・デ・コロン

箔押しが目を引くパッケージから取り出されたのは、金色の眩しい香水瓶。金子先生の“お供”はイヴ・サンローランのオー・デ・コロン「CINEMA」。映像文化設計ゼミを受け持つ金子先生にぴったりのタイトルだ。イベントの際、香りについて研究している常連リスナーから贈られたとのこと。自宅用はまた別で、「CINEMA」は学校用。ということで普段はゼミ室の机に置いてあり、授業の前など、気分を切り替えるときに使用する。華やかながら、落ち着いた香りがある匂いだ。「すっ、と集中しただけの状態になれる。切り替えスイッチにもなっていますが、初心を思い起こさせてくれるものでもあります」



海老塚耕一先生 with 本

「常に本は持ち歩いているね。昔は酒なんかも入ってたけど」と鞆から取り出したのは、ジョン・リチャードソン著『ピカソII』とベルナルド著『ジョルジュ・ブラック 絵画の探求から探求の絵画へ』。寝る前でも気になったたらすぐに読みたいと思うため、寝室は本だらけ。ふと「あの本の、あの文を引用したい」と思ったら即確認。探すより先に買うことも多く、気がついたら同じ本が二、三冊あることも。最近は、辻原登の全作品を読破しようと計画中。「最近Kindleでも読む。もう三台目になるかな。もともとは電子書籍反対派だったんだけどね」「お供」への思いは、「いつも一緒にいてくれてありがとう」。



大島徹也先生 with 赤ペン

「実用性最優先ですかねえ」と取り出したのは赤ペン。「uni ボール シグノ極細シリーズ」だ。太さは0.28、0.35、0.5 ミリに加えて太字用の4種類。速記の時は0.5 ミリ、マルチに使う0.38 ミリ…と、使うものやタイミングによって使い分けている。学生時代から愛用のシリーズで、ニューヨークへの留学時代には大量に買いだめして持参したという思い出も。以前から100円ショップで買うことが多かったが、とある100円ショップでしか取り扱いがないため、周辺の店舗の確認が欠かせないという。「廃番にならないで欲しいです。ロングセラーであり続けてくれれば…あとできれば、もっと取り扱うお店が増えたらうれしいですね」



家村珠代先生 with 情報デザイン棟

芸術学科の隣にある情報デザイン学科。実は、その建物の中を抜けて芸術学科の校舎に入ることができる。知る人ぞ知る近道だ。「いつも何かを作っていて、通るたびに刺激を受けます」理論を学ぶ芸術学科とはまた違った、情報デザイン学科のクリエイティブな雰囲気は、作家を育てることを主眼とした美大ならではのもの。「情報デザイン棟を通過してから芸術学棟に入ると、『少しおとなしいな』と思う時があります。もっと自由に、もっと挑戦していい。学生の皆に、いろいろと挑戦して欲しいです」と家村先生は目を輝かせる。「本当に何でもいいと思うの。バドミントン大会とか、皆でカレー作るとか!」



東京都写真美術館学芸員・事業企画課長

関次和子 さん

在学中は東野芳明ゼミで企画展運営を学ぶ

写真に関して世界有数のコレクションを誇る東京都写真美術館。関次和子さんは学芸員として展覧会の企画に携わり、自然写真史、山岳写真史を研究している。学芸員の醍醐味はどこにあるのだろうか。



関次さんが勤務する東京都写真美術館（*）

日本はキヤノンやニコンなどの大手を筆頭に多くのカメラメーカーを擁するカメラ大国である。会社をリタイアして山歩きを始め、風景写真を撮り始める愛好家がたくさんいるという。風景や動植物などの自然を被写体とした写真は、日常の中でも最も多く目にする

写真ではないだろうか。東京都写真美術館で学芸員・事業企画課長を務める関次和子さんは「自然写真は愛好家の多いジャンルではあるが、歴史などを体系的に調査し研究した人物が意外に少ない」と話す。その歴史を明らかにしたいと思い、関次さ



『嶋田忠 野生の瞬間 華麗なる鳥の世界』展の展示風景（撮影＝藤澤卓也 提供＝東京都写真美術館）

んは日本の自然写真の系譜をたどる研究を始めたそうだ。そして見えてきたのが、「写真は機械で撮るものである以上、シャッターチャンスや天候に左右されることも多い」ということ。コンテストの審査をするときのことを振り返ると、「素晴らしい写真が偶然的な産物であることもあれば、訓練と観察による賜物であることもある」という。そして、真に人を惹きつける作品はただ美しいだけではなく、「写真家の努力がにじんでいる」という。

昨年七月、同館で開かれた『嶋田忠 野生の瞬間』展は、まさにそのことを体現した事例だった。国際的に評価が高い写真家の嶋田忠さんが国内外の様々な土地で撮った鳥は、どの作品も目をみはる美しさを見せる。たとえば、バプア・ニューギニアの奥地の密林で撮った、フウチョウと呼ばれる美しい鳥の求愛のダンス。羽を傘のように広げて踊る



関次さんが携わった展覧会のカタログの一部（*）

姿はユーモラスでもある。嶋田さんは過去十数回にわたって現地を訪れ、ひたすらシャッターチャンスを待った。そして、それまでベールに包まれていたフウチョウの生態を明らかにしたという。

二〇〇二〜〇三年にかけて開かれた写真展『永遠の蒸気機関車くろがねの勇者たち』も印象深かったという。蒸気機関車は懐かしいだけでなく、人によって悲しい記憶と結びついていることもある。なぜなら戦時中の輸送手段としても利用されていたからだ。展覧会に訪れた人の声を拾いたいとの思いから、関次さんは展覧会にメッセージノートを用意した。

来場者のメッセージを読もうとノートを開くと、そこには「子供の頃蒸気機関車に乗中、目の前で空襲に遭って亡くなった弟のことを思い出し涙が止まらない。今のような時代になって本当によかった」との内容が記さ

れていたという。関次さんは来場者の琴線に触れるような展覧会が企画できたことを喜ぶのと同時に、作品を選んで飾るという行為の重みを感じたという。関次さんは本学科を卒業後、一年間の民間企業勤務を経て東京都写真美術館でのキャリアを歩んできた。現在は学芸員として展覧会を企画するだけでなく、事業企画課長として同館の企画全体を見渡す仕事もしている。

「美術館の運営システムは非常に戦略的です」と関次さんは言う。まず学芸員の会議で各人の持ち寄った企画について、調査研究の成果の上に立った内容か、入場者数は目標を達成できそうかなど、質と量の両方を検討する。その後、企画諮問会議で学識経験者等のアドバイスをもらい、館長が最終決定をする。企画のラインナップやバランスを考えて展示全体の計画を進めるのは、課長としての大切な役割なのだそう。

学生時代には、美術評論家として著名だった芸術学科創設時の教授の東野芳明先生のゼミに所属し、展覧会の企画について学んだ。特別授業で、革新的な美術家だった荒川修作さんや日本を代表する建築家の磯崎新さんから話を聞く機会もあった。「非常に刺激的な学生時代でした。特に学生が中心になって企画運営を手がけた現代美術展『TAMA VIVANT』は、今の仕事に就く上でとてもいい経験になりました」と言う。『TAMA VIVANT』は、現在本学科で運営している『TAMA VIVANT II』の前身の企画展だ。出展作家に連絡を取ったり図録を作ったりする実践的な演習は、その頃から本学科の特徴的な授業だったのだ。

その中で写真家の畠山直哉さんの作品展示を提案し、実現したことがあった。まだ畠山さんが木村伊兵衛写真賞などの賞を受賞する

前だったが、作品にはすでに才能があふれ出ていた。展覧会の運営は、一人の大学生の依頼に対して先鋭的な作家が本気になって展覧会をつくり上げてくれる貴重な経験になった。そしてどんな作家に出演してもらおうかというこの重要性を体に刻みこんだ。「今の時代にこの作家をなぜ選ぶのか、来場者に何を伝えたいのか、どう楽しんでもらうのかを、これからも真剣に考えていきたいです」という。学芸員が何をすべきかが凝縮されている言葉である。

取材・文・撮影（*）・レイアウト
井上優



（*）

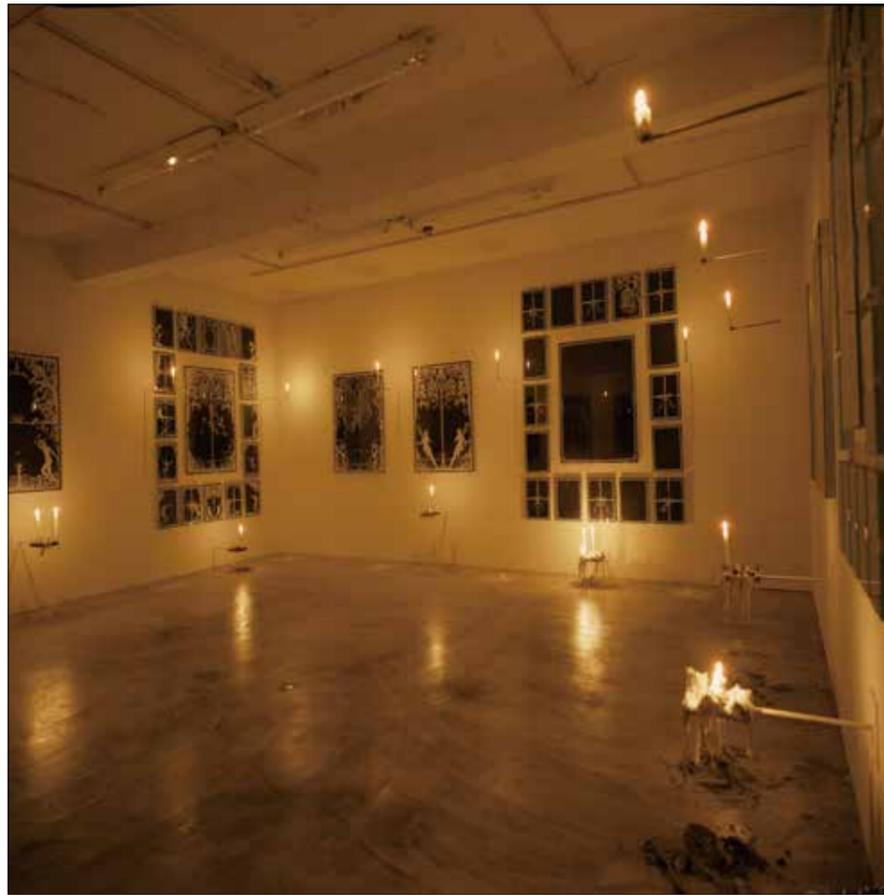
（*）1966年東京生まれ。多摩美術大学芸術学科卒業。民間企業勤務を経て東京都写真美術館勤務。生誕100年「ナチュラリス・田淵行男の世界」(2006年)、「中村征夫 海中2万7000時間の旅」(2006年)、「今森光彦 昆虫4徳年の旅」(2008年)、「田村彰英 夢の光」(2012年)、「黒部と植 冠松次郎と種刈三寿雄」(2014年)、「野生の瞬間 華麗なる鳥の世界」(2016年)などの展覧会を企画。Wildlife Photographers of the Year 2015 (Natural History Museum, London), 5th Singapore International Photography Festival 2016 (主催)員を務める。

アーティスト

駒形克哉 さん

作家も評論家も架空の美術作品とは？

本学芸術学科を卒業後、イタリア・ミラノに留学したアーティストの駒形克哉さんは、フィクションと実在をつなぐ作品をこれまで多く制作してきた。イタリアで制作したある画集には、作品写真や評論家による批評文が掲載されているのだが実は、話を聞いていると、ほかにはない駒形さんの魅力的な世界が見えてきた



秋も深まり始め、学内では葉の色づきも見かけるようになった頃、アーティストの駒形克哉さんの行きつけという都内のカフェで取材が実現した。お昼時を過ぎていたからか、店内には人少なく、最近流行のJ・POPをBGMに奥で店員が食器を片付けたり、テーブルを拭いたりとせわしなく動き回っている。「お待たせしました。柔らかな笑みを浮かべながら入ってきた駒形さんは、シンメトリーでかっちりとした作品や事前に見ていた本人の写真から感じた印象よりも穏やかな人柄であることがすぐに分かり、内心ほっと胸を撫で下ろした。



レラ美術学院に留学した経歴を持つ。イタリアは美術史の起源に近いお国柄、しかもローマ、ヴェネツィアなどの都市ごとに特徴的な文化を展開させている。そうした環境の中で一九八〇年代の留学時に制作したという作品をいくつか見せてもらった。当時のミラノでは、六〇年代後半から七〇年代にかけて展開した新聞紙や石など安価な素材を使うことを旨としたイタリアの芸術運動「アルテ・ポーヴェラ」(貧しい芸術)の流れにのった作品を作る学生が周りに多く、駒形さん自身もまたその一人だったそう。一方では、普通に油彩画も描いていたという。現地で得られるあらゆるものに対して食欲に学ぼうとしていた美術学生の姿が見えてくる。

留学先の卒業論文を基にした作品《カスパール・フィリップ・ゼーグスライヒの芸術と生涯》(一九九二年)について教えてもらうと、実にユニークなものだった。ある画家の画集として編集・制作された書籍なのだが、作家名・作品名に始まるすべてが架空の内容だったのだ。フランス綴じ(アンカット本)の書籍の造本、本文執筆、掲載作品の制作、翻訳などすべてを駒形さんが手がけたというから半端ではない。タイトルの画家、



だが、偽金だと思われた為に周囲は受け取らず通貨危機となった」といった内容の文章四行を挿し込んだ。文が発見されたのは十八世紀の画家の作品を修復の際、作者不詳の絵の裏側から見つかったことが書かれた雑誌の切れ端を駒形さんがミラノ市で見つけたという、入り組んだフィクションである。駒形さんは雑誌の切れ端まで制作し、発見時の情景を思い浮かべることができそうなほどに細かな設定がなされている。歴史を題材にして小

説を書くかのように、美術書や歴史書を制作する。何という発想なのだろうと思う。そこには、作家志望者であっても理論の学科である本学芸術学科に在籍することの意義が見えてくるように思えた。

その後駒形さんは、切り絵を技法にした作品を多く手がけるようになる。金紙が光で輝く一方で白い紙にのっぺりとした影が映る対比、蝋燭の光による自然のゆらめきやミラーボールの人工的な光の動きなど、光と陰の存

在が実に鮮やかで美しい。かたや真っ赤な画面の裏側に赤く熟れた果実が描かれている作品は、扉を開けないと見えない。鑑賞はこうしたアクションをすることで、駒形さんの世界へと導かれるのである。鑑賞者はまた、そこで作品が「物」であることを実感する。

駒形さんの作品は、フィクションなのに実在の証拠を示すある種の資料のようなものがある。同じフィクションである小説と異なるのは、証拠が「物」として存在することだ。「遺物(＝駒形さんの作品)が物体として存在するからこそ、ストーリーを考え、思いを巡らせる」と駒形さんは言う。そして鑑賞者は、フィクションであるにもかかわらず、そこに実在という概念に近い何かを感じる体験ができるのだろう。

取材・文・レイアウト 速水陽夏



評を寄せている美術史家、出版社などはすべて架空。唯一、翻訳者として記されている駒形さんの名前のみが実在の要素だという。そうすることで、限りなくノンフィクションに近いフィクションを作り上げたのである。

『ミダス王の金貨』は、きらきら光る金貨の作品。こちらも同様に駒形さんが制作した書籍の中で取り上げられている。本文は、古代ローマの詩人オウィディウスの変身物語の一節。ラテン語で「銅貨が金貨になると喜ん



編集プロダクション「シュークリーム」編集者

今井楓さん

「何がどのような形で役に立つかわからない」

本学芸術学科を数年前に卒業した今井楓さんが勤めているのは、編集プロダクションという職場だ。文字通り出版物の編集作業を請け負う。出版社と連携することも多く、近年は電子出版も増えている。編集者はどんなときに喜びを感じるのだろうか。



もともと漫画を読むことが好きで出版業界に興味があった今井楓さんが編集プロダクション「シュークリーム」に勤めることになったのは、本学科在学中のゼミで行った活動がかかわっているという。『PEEL YOUNG』などの女性向け漫画雑誌や、電子レーベルを複数手掛けているプロダクションだ。

骨董市巡りを趣味にしていた今井さんはある骨董市で知り合った骨董商兼アーティストのマンタム氏を大学に招き、当時所属していた映像文化設計ゼミ主催の上映会「金曜cinématique」の枠組みの中でトークショーを開催した。そのトークショーが本学情報デザイン学科の久保田晃弘教授の目に留まり、同年秋の本学芸術祭でメディアアセンダーが企

画し、マンタム氏がキュレーションを行なった『異界線』展の開催につながった。今井さんは事務作業や告知作業、当日の設営補助などを担当した。また、マンタム氏の別の展示のレセプションでシュークリームの社長に出会い、それがきっかけでアルバイトとして採用されたことから現在にいたる。「何がどのような形で役に立つかわからない」と今井さんは振り返る。それは、実際に仕事をし始めてからもしばしば感じるのだそう。シュークリームでは女性向け漫画雑誌の編集に携わっており、作家と会う機会が頻繁にある。彼らとの打ち合わせにおいて大事なものは、「相手の描きたいものを尊重した上で、自分の考えを伝えること」だという。一般に編集者は作家の黒子だが、情報や意見を伝えることで描かれる世界に広がりが出てくることも実際には多くある。そして「自分の考えを伝えること」においては、芸術学科在学中にこなしたたたくさんのレポート課題で培った能力が生きているという。自分が感じたことや考えたことをきちんと言語化する力を鍛えられたのである。

今井さんは電子コミックの表紙やグッズのデザインも担当することがある。学生時代にしては映画館のアルバイトで映画上映のタイムテーブルをAdobeのデザインソフト『Illustrator』で作っていた経験から任されたという。「学生時代にはたとえどんな些細なことでも取り組んでおくものだなと、今となっては思います」と語る今井さんの言葉には、強い説得力を感じた。

「この人と仕事をすることができてよかった」今井さんに思い出深かった仕事について聞くと、とある作家のことを語り始めた。「持ち込みで拝見した際、少し拙かったのですが漫画の構成や、登場人物の表情に光るものがある方がいました。『またこれぞ！』という作品があれば、ぜひ見せてください」と伝えて名刺を渡したところ、本当に次の作品を送ってきてくださったんです」その応募がきっかけで作画を担当してもらったことになった作品は、テレビCMやネット広告などを通じて周知を図ることができた。

「別の作品を仕上げた際に私の言葉を思い出してくれたことはもちろん、それをきっかけにたくさんの人に読んでもらえる作品と一緒に作れたことがうれしかった」

作家の努力が実を結んだ際、やりがいを感じられる仕事なのだ今井さんは目を輝かせながら教えてくれた。

取材・文・撮影・レイアウト＝眞田拓東



（いまい・かえ）1992年千葉県生まれ。2015年度多摩美術大学芸術学部芸術学科卒業。16年1月に株式会社シュークリーム入社後、編集者として電子レーベル「moment」「女の子のジーン」を中心に、主にボーナージタルコミックの編集を行う。

芸術と社会をつなぐ

つくる
Make

考える
Think

伝える
Communicate

アートをことばにす
世界に発信す



多摩美術大学芸術学科

〒192-0394

東京都八王子市鎌水2-1723

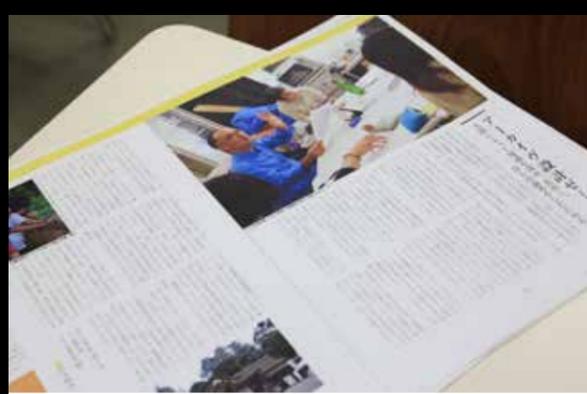
URL: <http://www.tamabi.ac.jp>

芸術学科に関するお問い合わせ

TEL : 042-679-5627

FAX : 042-679-5649

E-mail : geigaku@tamabi.ac.jp



原稿に間違いがないかどうかをチェックするために印刷された校正紙。誤字脱字を入念にチェックする



パソコン上で写真を貼り付け、原稿を流し込んで記事のレイアウトをする様子。Adobeの「InDesign」というソフトを使って作成する



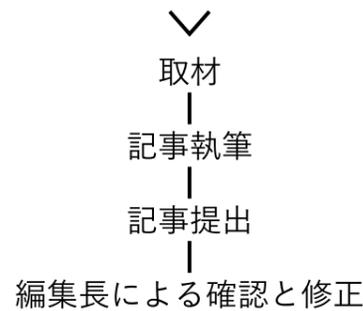
学生記者が書いた原稿の修正指導は、ワープロソフトの変更履歴を表示する機能を使って行われている。写真は、このコラムの原稿に編集長の小川敦生教授が赤字を入れたもの

印刷を委託している会社、八紘美術の印刷風景

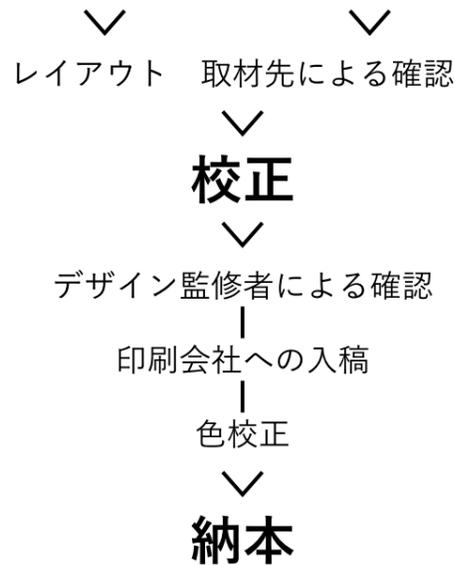


取材の担当を決める学生たち。取材する人物は、各学生、教員、研究室の助手たちがアイデアを出し合って決める

編集会議／企画の決定



完成原稿の作成



製本を委託している高村紙工所の製本風景。『R』の印刷部数はおおよそ2万部。製本を終えるのに2〜3日程度かかるという



芸学生が自ら取材、誌面で本学科の素顔をあらわに

納本され、積み上げられた『R』

本学芸術学科には、小川敦生教授が担当する「言語メディア計画」という授業がある。本学発行の雑誌『R』を一から制作するのが、授業の内容だ。

『R』は、学科の素顔を学生たちが自ら明らかにしようという自己確認の媒体だ。制作は、「学科の素顔を見せるためにはどんなコラムを作ればいいか」「どの授業を取り上げたいか」などを決める編集会議から始まる。二〇一五年度の授業を受けたのは主に一、二年生。以前『R』の制作に携わったことのある四年生も参加した。学生が提案した企画案の検討をする一方で、どのゼミあるいは授業を取材したいかといった希望を取り、担当を決める。取材の手法などは新聞および雑誌の記者や編集長を経験した小川教授が事前にレクチャーする。しかしうかうかしてはいられない。たとえば取材対象の卒業生はたいてい仕事に多忙ゆえ、ゆっくり構えているとタイミングを逃すおそれがある。学生記者たちは電話やメールでアポイントを取り、授業が始まって一カ月も経たないうちに取材に走り始める。

次はいよいよ記事の執筆だ。いつどこで何をといった「5W1H」を書くことや情景描写の具体的な方法などについてのレクチャーは受けたものの、実際に筆を執るのは難しい。苦勞して書き、提出すると、『R』の編集長でもある小川教授による原稿の修正指導が行われる。以前の出版界ではプリントされた校正刷りに赤ペンで指摘が書き込まれるのが普通だったという。『R』ではパソコン上の原稿ファイルに小川教授が修正を赤字で書き込む。もともとの原稿が見えなくなるくらいに真っ赤な指摘で埋まって戻ってくることもしばしばだ。修正を学生が原稿に反映し、再度提出。ゴースインが出ると「完成原稿」として、今度はレイアウト作業に移る。

レイアウトはパソコン上で専用のソフトウェアを使って行われ、記事の完成原稿と集めた写真を組み合わせながら誌面のイメージ上に貼り付けていく。同時に取材先や関係者などに原稿の内容に間違いがないかどうかを確認してもらおう。さらに校正を重ねる一方で、デザイン監修者の須山悠里さんにレイアウトのチェックをしてもらおう。問題がなければ印刷会社に入稿する。最後に記事の写真等の色が間違っていないかを確認する「色校正」を行ない、ようやく印刷会社での印刷が始まる。そして納本。こうして初めて多摩美術大学芸術学科発行の雑誌『R』が完成するのだ。

本学科が発行している雑誌『R』は、二〇一四年の創刊以来、本学科を卒業した人々や八人の専任教員が担当するゼミの内容を在学生在が記者として取材、執筆し、記事にしてきた。ここでは、その『R』がどのようにして作られているかを改めてレポートした。

多摩美術大学 オブジェクト 図鑑

デザイナーの杉浦非水を初代校長に迎えて一九三五年に多摩帝国美術学校として開校した多摩美術大学は、歴史を語る中で学内に様々な作品を設置してきた。学校のシンボルのようにそびえ立っているものから、なんなのだろうと気になってしまふもの、さらには言われなければ気づかないものまで多様だ。この記事では、昨年亡くなった関根伸夫氏の作品をはじめとするさまざまなオブジェクトと建築を紹介する。

1: 伊東豊雄
《多摩美術大学図書館》



2: 関根伸夫 《空想》



3: 長澤英俊 《TINDARI》



4: 関根伸夫 《丸と四角》



5: 関根伸夫 《思想の石》



6: 関根伸夫 《大地のベンチ》



7: 建畠覚造 《オルガンII》



8: 工藤健
《懐かしのマンドーラ》



9: 五十嵐威暢
《Dragon Spine》



10: リチャード・セラ
《反転し合う直角、ヘキサグラムの基礎版を取り囲むために》



11: 竹田光幸 《走り行く手》



12: 中井延也 《暁》



なぜ「オブジェクト」なのか

本来、現代美術の立体作品に対しては「オブジェ」という用語を用いるのが普通だが、この記事ではその語源である「オブジェクト」という言葉を採用した。というのは、美術作品もオブジェクトすなわち「物」であるという原点に帰って作品と向き合うことを考えたからだ。一方で芸術はただ「物」であるだけでなく、「制作者の中にある思想や感情等を、産み出した作品に反映させたもの」という側面を持つ。この記事で取り上げた作品群もその例に漏れないことが、キャンパスを歩きながら調査することで実感できた。



17: 建畠覚造 《Piled Cone》



13: 作者不詳 猫らしき彫刻



14: 作者不詳 石のベンチ



15: 作者不詳
向き合う二つの椅子



16: 作者不詳
動物のような石



世の中には、何気ない「オブジェクト」を芸術として昇華させた作品もある。男性用の小便器を寝かせて展示することで美術作品にすることを試みたマルセル・デュシャンの《泉》は、その最たる例である。しかし、外観の裏側には、既存の美術界の転覆を図るような革命的な作家の思いが潜んでいた。ここまで極端ではないにしても、「オブジェクト」に向き合ったときに作り手の心の中を想像してみるだけで、鑑賞者の心の中も豊かになる。興味が湧いた方はぜひ、本誌を片手に、八王子キャンパス内を歩き、それぞれの「オブジェクト」との対話を試みてほしい。

取材・撮影・文＝呼坂悠太、黄源明

編集後記

▼芸術学科は教授と生徒の距離が近いので、履修登録の有無に関係なく、様々な専門分野を持つ先生方と接点を持つことができる学科です。美術を深く理解したいと望む学生には最適な環境だと思います。受験生の皆さんには、是非芸術学科に入学して美術についての造詣を深めて欲しいです。(井上優)

▼取材から編集まで、初めて行った作業がこのような形になったことに感動しています。作業の過程において芸学の面白さに気づかされる場面が多かったです。貴重な経験をありがとうございました。(内田稜真)

▼2度目の履修でしたが、右も左も分からなかった2年前に比べて、2020年版「R」にはよりリアルな芸学の実態を窺い込めることができたと思っています。相も変わらずはっきりとした形を持たない学科ですが、3年目にもなると無機質な教室への愛着も一入です。締め切りと小川教授が交互に脳裏に浮かぶ日々を乗り越え完成したこの冊子を片手に、大きな山にぼつねんと佇む芸学に足を踏み入れる後輩に会えること、楽しみにしています！(小林りの)

▼今回初めて、雑誌に載せるための文章を書きました。レイアウトなどの作業を手伝っていただきながら、なんとか記事を仕上げることができたので嬉しいです。授業での経験を今後に繋げていきたいなと思います。(大野空暁)

▼実際に企画、取材、編集に関わることで今後の活動に役に立つ、貴重な体験ができました。文章を削って細るという行為に、情報を集約する効果があり、充実した内容を書けるようになりました。(齋藤匠磨)

▼芸術学科発行雑誌「R」内記事を担当したことで、「雑誌の制作過程」と「記者の仕事」の一端に触れることが出来た。特に、今まで責任感が伴う、目上の人に対する正式な取材をしたことがなかった私にとって、アポイントメントを取るから自分で行なった取材活動は非常に勉強になった。取材をした中で特に印象深かった出来事は、取材対象の編集者が成人向け漫画を担当していたため、取材内容の大部分の会話や写真が実際に記事へ載せられなかったことだ。印象深かった話や漫画家との生々しい会話など、一般に公開するのははばかれるが中々知ることの出来ない踏み込んだ話を自分だけで独り占めしてしまう形になったことは、少し嬉しいような、しかし多くの人にも聞いて欲しい複雑な心境である。もしも「R」で成人向け版を発行することになった際には、是非とも今回の惜しむらくもお蔵入りとなった会話を記事にしたい。(眞田拓東)

▼べ切と赤ペンの直しに追われ「もう「R」はやらない…」と泣きながら編集後記を書いた昨年度。それから一年後の今、「もう「R」はやらない…」と再び編集後記を書いています。周囲の方々の協力と優しきがあって、記事を書くことができました。感謝してもきれません。ありがとうございました。(島崎亜美)

▼私は文章を書くのが苦ではないのですが、雑誌に載せるような文はあまり経験をしていないため、楽しくもちょっとした言葉や描写などが難しかったです。取材だけでなくレイアウトをしたりと、課題にもまれながらも今後自分が経験することはないであろう分野に触れられたのは貴重なものになりました。(速水陽夏)

▼本講義では雑誌を作るという一つのテーマのもと他の方と協力しながらの執筆が多く、相談を繰り返しながら一つの記事を作り上げていく過程は新鮮で楽しかったです。また今回は「多摩美オブジェクト図鑑」を担当させて頂きましたが、記事を通して学内の風景に紛れ込んでしまっている数々の作品の魅力について再認識することが出来たように思います。(黄源明)

▼今、私がいるのはどんな場所だろうか？自分が学んでいる環境を取材し、客観的な視点で捉え、伝えるための言葉を紡ぐ。編集という共同作業を通して、自分自身を見つめ直した。何より、現物となった「R」を手に入れる日が待ち遠しい。(松岡直希)

▼InDesign(レイアウト用パソコンソフト)を使った作業が苦手なので、編集作業が大変でした。でも、自分の書いた文章が冊子になり、誰かの目に届くということにとってもワクワクしています。読者の皆さんに「芸学ってなんか面白いな」と思ってもらえたら嬉しいです。(三津田恵)

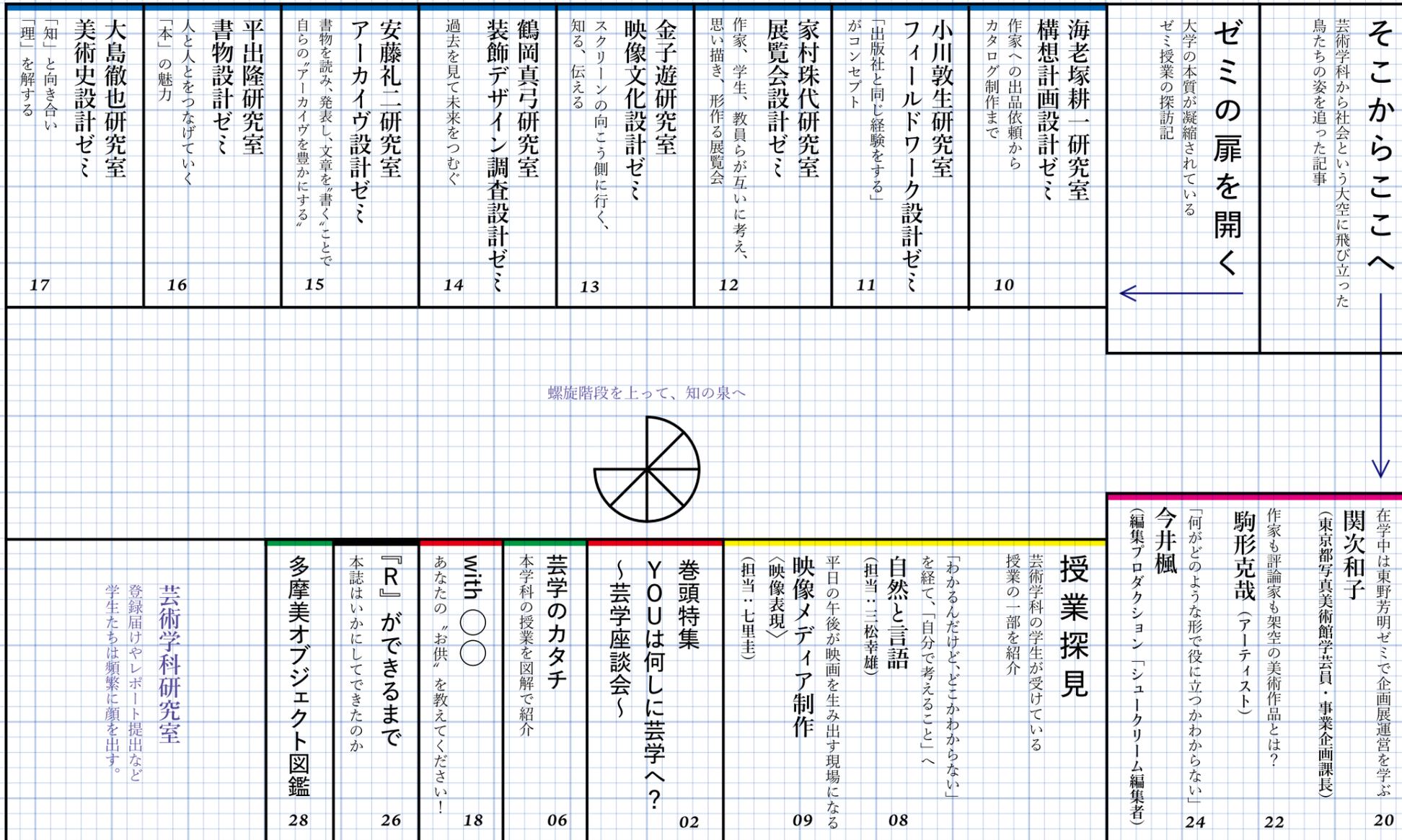
▼今回初めて、芸術学科発行の雑誌「R」の編集に携わり、締め切りと責任感、文章の書き方についてじっくり向き合う時間を持つことができました。担当したのは、新企画「with○○」の学生と非常勤講師の欄です。この企画により、リアルな芸術学科の日常をちらっとでも見られたのではないかと思います。本誌のすべての企画によって、芸術学科の学生や受験生に「芸術学科の素晴らしさ」を届けられることを願います。(ムンジョン)

▼今回、TA(ティーチング・アシスタント)として参加いたしました。雑誌編集にはアイデアを出し合い、発表させ、実践するといった、「チームで行う制作」における重要なエッセンスが全て詰まっているのだなと実感しました。編集に参加した学生の皆さんが、今回の経験を通してより成長していくことを願っています。(小野暢久)

▼年末年始をはさむ2ヶ月間は、本誌の制作作業が佳境に入るため毎年地獄の中をさまよっています。そしてそこから抜け出した時の爽快感といったら！今年本誌の編集制作作業に携わった学生記者・編集者からもたくさんの学びを得ました。(小川敦生)

本誌の構造

本学八王子キャンパス芸術学棟の実際の構造をベースに、本誌の構造を描き出しました。目次の機能もあります。



「R」について

「芸術学科(芸学)」とはなにか。この問いに対して芸術学科の学生が自ら取材をし、記事にしたのがこの媒体です。研究、批評、キュレーションなど芸術に対して様々なアプローチをする実像が浮かび上がりました。なお誌名は、芸術を意味するフランス語「art」から取っています。

R

R[アール] 2020
2020年3月23日発行

顧問=平出隆(多摩美術大学芸術学科教授)
編集長=小川敦生(同)
編集協力=芸術学科研究室
ティーチング・アシスタント=小野暢久、章抒語
編集=井上優、大野空暁、齋藤匠磨、眞田拓東、黄源明、松岡直希、小林りの、内田稜真、島崎亜美、速水陽夏、三津田恵、ムンジョン、呼坂悠次、徳川葉南
デザイン監修=須山悠里(suyama design)
印刷=株式会社 八紘美術

発行=多摩美術大学美術学部芸術学科
〒192-0394 東京都八王子市鏈水2-1723
Tel. 042-679-5627

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。

企画を立てて入学しよう！

企画力を問う「推薦入試」を実施

こんな展覧会を企画したい

こんな雑誌を発行したい

こんな映画祭を開きたい

こんなコンサートを制作したい

多摩美術大学美術学部芸術学科では、「学校推薦型選抜」を実施しています。

問われるのは、アート・プロデュースをする力です。

応募に際しては、受験生の皆さん自身が書いた「企画書」を提出してもらいます。

出願期間・合格発表等の日程の詳細は、4月以降に大学webサイト等で発表します。

出願に関する詳細については「2021年度学生募集要項」(7月上旬アップロード予定)でご確認ください。

問い合わせ先＝多摩美術大学美術学部芸術学科研究室

(電話：042-679-5627)